

寿町一丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡（寿町一丁目地区）

2017年3月

株式会社 和田コーポレーション

高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、寿町一丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松城跡（寿町一丁目地区）の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：高松市寿町一丁目地内
調 査 期 間：平成 28 年2月2日～3月 10 日
調 査 面 積：549 m²（東調査区：155 m²、西調査区：215 m²、中央調査区：179 m²）
- 3 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が実施し、その費用は株式会社和田コーポレーションが負担した。
- 4 発掘調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 高上拓及び同非常勤嘱託職員 新井場萌が担当した。
- 5 整理作業及び報告書執筆・編集は新井場が担当し、高上が補佐した。
- 6 発掘調査から整理作業にあたって、香川県教育委員会の御協力を得た。記して厚く謝意を表す。
- 7 本報告書の高度値はT.P.を表し、座標はIV系（世界測地系）を表す。方位は座標北を示す。
- 8 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設業務委託：株式会社 四航コンサルタント
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第 I 章 調査の経緯と経過	1
第 1 節 調査の経緯	1
第 2 節 調査の経過・調査日誌	2
第 II 章 地理的・歴史的環境	3
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 調査の成果	6
第 1 節 調査の方法	6
第 2 節 基本層序	9
第 3 節 遺構・遺物	13
第 IV 章 まとめ	24
参考・引用文献	5,23,26

挿 図 目 次

第 1 図 発掘調査対象地と周辺の位置図	1
第 2 図 高松平野	3
第 3 図 周辺の主要遺跡	4
第 4 図 調査の様子	6
第 5 図 全調査区遺構配置図 (S=1/150)	7-8
第 6 図 基本層序	9
第 7 図 東調査区平面図 (S=1/100)・土層図 (S=1/60,1/100)	10
第 8 図 西調査区西側平面図 (S=1/100)・土層図 (S=1/60,1/100)	11
第 9 図 中央調査区西側平面図 (S=1/100)・土層図 (S=1/60,1/100)	12
第 10 図 SX110 出土遺物実測図 (S=1/4)	13
第 11 図 SP102・SP103・SP108・SP109 平・断面図 (S=1/40)	14
第 12 図 西調査区 SX105 平面図・北壁土層図 (S=1/60)・断面図 (S=1/40)	16
第 13 図 SX105 出土遺物実測図 (6～16 S=1/4・17 S=1/3)	17
第 14 図 SX105 出土遺物実測図 (S=1/4)	18
第 15 図 造成土より下位で A 層より上位の整地出土遺物実測図 (31～33 S=1/3・34～39 S=1/4)	19
第 16 図 A 層出土遺物実測図 (40,41 S=1/3・42～52 S=1/4)	20
第 17 図 B 層出土遺物実測図 (S=1/4)	21
第 18 図 C 層出土遺物実測図 (S=1/4)	22
第 19 図 攪乱出土遺物実測図 (86,87 S=1/3・88～91 S=1/4)	23
第 20 図 生駒家時代讃岐高松城屋敷割図 (高松市歴史資料館所蔵)	25
第 21 図 高松城下図屏風 (香川県立ミュージアム所蔵)	25
第 22 図 旧高松御城全図 (香川県立ミュージアム所蔵)	26

第 23 図	共進会場平面図（高松市歴史資料館所蔵）	27
第 24 図	高松市主催全国産業博覧会場並陳列館配置図（高松市所蔵『高松市主催全国産業博覧会誌』から引用し一部改編して掲載）	27

挿 表 目 次

第 1 表	発掘調査工程表	2
第 2 表	整理作業工程表	2
第 3 表	周辺の主要遺跡名	4
第 4 表	出土土器観察表 1	28
第 5 表	出土土器観察表 2	29
第 6 表	出土土器観察表 3	30
第 7 表	出土土器観察表 4	31
第 8 表	出土瓦観察表	31

図 版 目 次

図版 1	東調査区精査状況（西から）、中央調査区掘削風景（北から）、
図版 2	西調査区第 6 ～ 10 地点掘削状況（北から）、西調査区第 16 ～ 18 地点検出状況（東から）
図版 3	西調査区第 16 ～ 18 地点掘削状況（東から）、西調査区第 16 地点北壁土層（南から）
図版 4	東調査区①検出状況（東から）、東調査区②検出状況（東から）、東調査区③検出状況（東から）、東調査区④検出状況（東から）、東調査区⑤検出状況（東から）、西調査区⑥検出状況（西から）、西調査区⑦検出状況（西から）、西調査区⑧東壁土層（西から）
図版 5	西調査区⑨検出状況（西から）、西調査区⑩検出状況（西から）、中央調査区⑪検出状況（東から）、中央調査区⑫検出状況（東から）、中央調査区⑬検出状況（東から）、中央調査区⑭検出状況（東から）、中央調査区⑮検出状況（東から）、西調査区⑯ C 層上面出土須恵器杯（東から）
図版 6	SX110 東西畦土層（南から）、SP102 半裁状況（東から）、SP102 完掘状況（東から）
図版 7	SP103 半裁状況（東から）、SP103 完掘状況（東から）、SP108・SP109 完掘状況（西から）
図版 8	造成土より下位で A 層より上位の整地出土遺物、A 層出土遺物
図版 9	B 層出土遺物、C 層出土遺物
図版 10	SX110 及び第 14 地点出土遺物、攪乱出土遺物、第 16 地点出土須恵器、SX105 出土遺物、SX105 出土土型（内面）、SX105 出土土型（外面）
図版 11	SX105 出土磁器、SX105 出土瓦

第 I 章 調査の経緯と経過

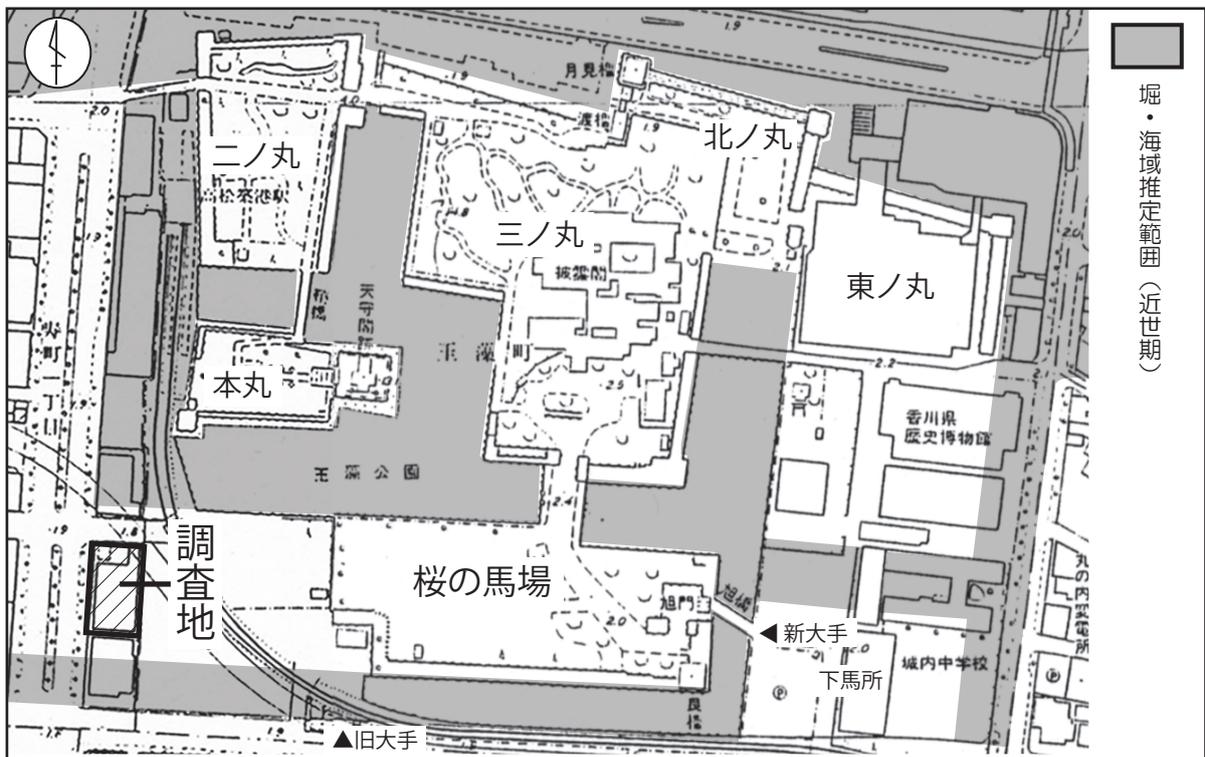
第 1 節 調査の経緯

本書に掲載する高松城跡（寿町一丁目地区）の調査の契機となったのは、株式会社和田コーポレーションによる、マンション建設工事計画である。

平成 27 年 10 月 23 日付けで事業者から高松市教育委員会に対して事業地の試掘調査の依頼が提出された。本市教育委員会は提出された依頼に基づき、平成 28 年 1 月 6 日に試掘調査を実施した。調査の結果、中世～近世前半期の遺構と遺物を確認した。事業地は農林中金ビルの解体跡地であり、また、試掘調査に先行してビルの解体が実施されていた。その影響で攪乱を受けていたが、遺構面の残存状況や出土遺物から高松城築城に伴う遺構の可能性が高いと考えられ、高松城の築城過程を明らかにする上でも重要であると判断した。この結果を受けて、事業地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（寿町一丁目地区）」に登録された。

その後、事業者と本市教育委員会は工事の計画について協議を行い、平成 28 年 1 月 12 日付けで事業者から文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が本市教育委員会に提出された。その届出を本市教育委員会から香川県教育委員会に進達したところ、同年 1 月 14 日付け教生文第 17113-2 号で香川県教育委員会より、工事着工前に発掘調査を実施する旨の指導があり、事業者に伝達した。

その後、発掘調査の実施に向けて事業者と本市教育委員会は協議を重ね、合意が形成されたため、同年 1 月 22 日付けで事業者と、業務を管理する高松市、業務を監督する高松市教育委員会の三者で協定を締結し、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとし、平成 28 年 2 月 2 日に発掘調査に着手した。



第 1 図 発掘調査対象地と周辺の位置図

第2節 調査の経過・調査日誌

発掘調査は平成28年2月2日から同年3月10日において実施し、市文化財課の調査員2名が担当し、株式会社和田コーポレーションより業務委託を受けた株式会社村上組が現場監督及び重機掘削を担当し、株式会社ワークサービスで雇用された掘削作業員及び記録作業員によって調査を行った。(第1表参照)

発掘調査はマンション及び立体駐車場が建設される範囲を対象とし、遺構面への影響が考えられる建物基礎部分に合わせて範囲を設定した。全体の調査面積は約549㎡であり、廃土置きを調査地内で確保する必要性から3分割し、調査地東側(155㎡)、調査地西側(215㎡)、調査地中央(179㎡)の順で実施した。

調査時には調査地東側を東調査区、中央を中央調査区、西側は南北に分割し西調査区南側、西調査区北側と呼称し記録及び遺物の取り上げを行った。本報告書においても、この呼称を原則継承するものとする。

整理作業及び本報告書作成の作業行程については第2表のとおりである。

第1表 発掘調査工程表

作業項目	2月													
	2 火	3 水	4 木	5 金	8 月	9 火	10 水	11 木	12 金	13 土	15 月	16 火	17 水	18 木
準備等														
重機掘削														
人力掘削														
精査／検出														
写真撮影／図化														
埋戻し／撤収／他														
作業項目	2月							3月						
	19 金	22 月	24 水	25 木	26 金	29 月	1 火	2 水	3 木	4 金	7 月	8 火	9 水	10 木
準備等														
重機掘削														
人力掘削														
精査／検出														
写真撮影／図化														
埋戻し／撤収／他														

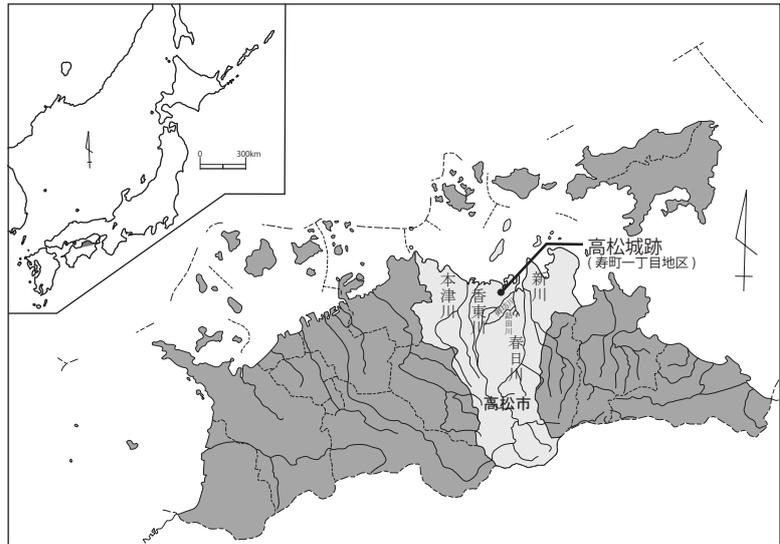
第2表 整理作業工程表

作業項目	H28											H29		
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
洗浄														
接合・復元														
遺物実測														
遺物トレース														
遺構トレース														
図版レイアウト														
写真撮影														
原稿執筆														
編集														
校正														

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西 20 km、南北 16 km の範囲に及んでいる。また、この平野は讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。高松城



第2図 高松平野

の城下町として発展した高松市街地は香東川の東流路が瀬戸内海に注いでいた河口である中州や砂堆上に立地している。このため、城下町は高松城築城と同時にこの中州や砂堆を大規模に埋め立てられて形成されたと考えられている。現在、香東川は石清尾山山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、讃岐高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第2節 歴史的環境

高松市街の下に埋没する中州や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは、弥生時代後期である。松平大膳家上屋敷跡の発掘調査では、基盤となる砂堆上面より柱穴とともに弥生土器が出土していることから、付近に集落が存在した可能性が指摘できる。この発掘調査では、平安時代前期の溝跡も確認されている。当時、この地域は篁原郷と呼ばれ、安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末頃）に立券庄号されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里により表記されており、条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられることから、遅くとも平安時代の終わり頃には、周囲の土地が安定し、人が恒常的に居住できるようになっていたと考えられる。

そして西の丸地区での発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の護岸施設と考えられる礫敷遺構と木製碇が検出され、西浜に港が所在していたことが明らかになっている。また搬入土器が高い比率で確認され、他地域との交流が活発であったことがうかがえる。東町奉行所跡においても13世紀の礫敷遺構が検出され、舟入の可能性が考えられている。高比率で搬入土器が認められることから、東浜にも港があった可能性が考えられる。これらの中世前半の港湾施設は13世紀には埋没しているが、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」に野原を船籍地としたものが見られ、中世後半にも野原に港が所在したことがうかがえる。これら港と集落との関係は不明で

あるが、中世前半の港であった西の丸地区の西に位置する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺を埋納していたことから寺跡にも考えられる 13 世紀末～15 世紀末の集落跡が確認されている。また片原町遺跡においても屋敷地（居館）を囲むと想定される 15～16 世紀の L 字形の大溝が検出されている。一方、応永 19 年（1412）の「北野経王堂一切経」の奥書には、野原の寺院として無量寿院・極楽寺・福成寺が見られることから、野原に寺院が多く所在していたことがうかがえる。このうち、高松城跡（寿町一丁目）では、「野原濱村无量壽院 天文（以下欠損）九月（以下欠損）」と刻まれた瓦が出土するなど無量寿院に関する遺構・遺物が確認されている。また高松城の北端付近に位置する鉄門の調査では、わずか 71 m²の調査において五輪塔 29 個と石仏 1 個が出土しており、天守台石垣の栗石層からも多種多様な石造物が出土しており、中世段階に周辺に寺院や墓地の存在が推定できる。この頃の野原に基盤をおいた中世の領主層については「南海通記」に数多くの小領主の名が見られ、寺院とともに中世後半において経済基盤を有した港町であったことを示している。

近世に入り、豊臣秀吉の四国平定により、天正 13 年（1585）に長宗我部元親が降伏し、讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後、尾藤知宣の領国となったが、天正 15 年（1587）



第 3 図 周辺の主要遺跡

1. 東ノ丸跡 2. 水手御門 3. 県民小ホール地区 4. 県立歴史博物館地区 5. 西の丸町地区Ⅱ 6. 西の丸町地区Ⅲ 7. 作事丸 8. 西内町 9. 地久槽 10. 高松北署地区 11. 内町 12. 三の丸 13. 西の丸地区Ⅰ 14. 地久槽台 15. 丸の内地区 16. 松平大膳家中屋敷跡 17. 松平大膳家上屋敷跡 18. 三の丸、竜槽台北側 19. 西の丸町D地区 20. 丸の内 21. 寿町一丁目（無量壽院跡） 22. 中堀、北浜町 23. 丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業 24. 丸の内、再生水管布設工事 25. 丸の内、個人住宅建設 26. 二の丸、玉藻公園西門料金所整備工事 27. 外堀、西内町、共同住宅建設 28. 丸の内、共同住宅 29. 東町奉行所跡 30. 西の丸町 31. 丸の内 32. 丸の内 33. 鉄門 34. 厩跡 35. 外堀、兵庫町 36. 寿町二丁目地区 37. 天守台 38. 江戸長屋跡Ⅰ 39. 江戸長屋跡Ⅱ 40. 丸の内 41. 丸の内 42. 城内中学校 43. 中堀南岸石垣 44. 本町 45. 丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業 46. 浜ノ町遺跡 47. 片原町遺跡 48. 紺屋町遺跡 49. 生駒親正夫妻墓所 50. 扇町一丁目遺跡 51. 亀井戸跡 52. 大井戸 53. 雑賀城跡 54. 二番丁小学校遺跡 55. 丸の内 56. 高松城跡（寿町一丁目地区） 57. 高松城跡（丸の内地区）

第 3 表 周辺の主要遺跡名

に生駒親正が入封し、讃岐一国を領した。高松城は生駒親正の居城として、翌天正 16 年（1588）から築城が開始された水城である。城の構造は、内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし、内堀より内部に本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。天守、地久櫓等を設けた本丸は、堀により他の曲輪から独立した形をとっている。本丸と二ノ丸をつなぐ鞆橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。寛永 17 年（1649）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、代わって松平頼重が寛永 19 年（1642）に水戸から入部し、高松藩主となり東讃岐 12 万石を領した。松平頼重は、城の改修を度々行っているが、大規模な改修としては、寛文 10 年（1670）に天守を改築、その翌年から東ノ丸、北ノ丸を造成し、月見櫓・続櫓・渡櫓等を建築し、北に設けた水手御門より直接、海へ出入りができるようにした。その後、高松城には大きな改変は行われず、11 代、約 230 年間にわたり高松松平家の居城となっていたが、慶応 4 年（1868）官軍に開城することとなった。

発掘調査では、頼重・頼常による大改修に伴う遺構が多数検出された。東ノ丸跡では東ノ丸の新造に際して新たに開削した中堀を検出した。さらに、天守台の発掘調査では天守の地下 1 階が検出された。その床面では礎石が 58 個検出され、入口の 6 個を除く 52 個の礎石は「田」の字状に並んだ状態で検出された。さらに、「田」の字状に並んだ礎石に囲まれた 4 箇所において柱穴が検出され、このうち北西と南東の柱穴には直径 30 cm のツガ科の丸柱が残存していた。柱材は放射性炭素 C14 年代測定法による年代測定において、西暦 1630 - 1660 年代の可能性が高いことが示され、松平頼重による改修時に伐採されたと考えられる。また、外曲輪において多くの発掘調査が行われ、絵図や文献との整合が確認された。内曲輪へ入る旧大手前に面した藩主連枝の松平大膳家の屋敷地では「高松市街古図」に描かれた位置で門を検出したほか、同家の家紋をあしらった理兵衛焼や瓦が出土した。同様の事例は、西の丸町地区の発掘調査において、「高松城下図屏風」に描かれた鉤型の道路が検出され、生駒期には上坂勘解由、松平期には大久保家の屋敷地であり、そのことを示す木簡や家紋瓦が出土した。外曲輪における既跡では「高松城下町屋敷割図」に「井戸址」という記載が見え、同位置で生駒家の家紋が刻印された石材を使用した大型井戸が検出された。さらに、東町奉行所跡では奉行所を囲む堀跡と考えられる遺構が検出された。一方、城下の調査例は多くはなく、二番丁小学校遺跡において武家屋敷が検出された。町屋では江戸時代には紺屋町と鍛冶屋町に比定される紺屋町遺跡のうち鍛冶屋町に相当する場所から、ふいご羽口や鉄滓が出土したほか、城下の水源地である亀井戸の一部が発掘された。今回の調査は、かつての内曲輪、桜の馬場の一角に相当する地点である（第 3 図の 56）。

—参考・引用文献—

高松市教育委員会 2003 『高松市埋蔵文化財調査報告書 63 集 史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 平成 11 - 13 年度調査』

高松市教育委員会 2013 『高松市埋蔵文化財調査報告第 147 集 史跡高松城跡（天守台）石垣解体・修理編』

高松市教育委員会 2015 『高松市埋蔵文化財調査報告書 163 集 丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（丸の内）』

大嶋和則 2016 「発掘成果に見る高松城跡」『中世港町論の射程 港町の原像：下』岩田書院

第三章 調査の成果

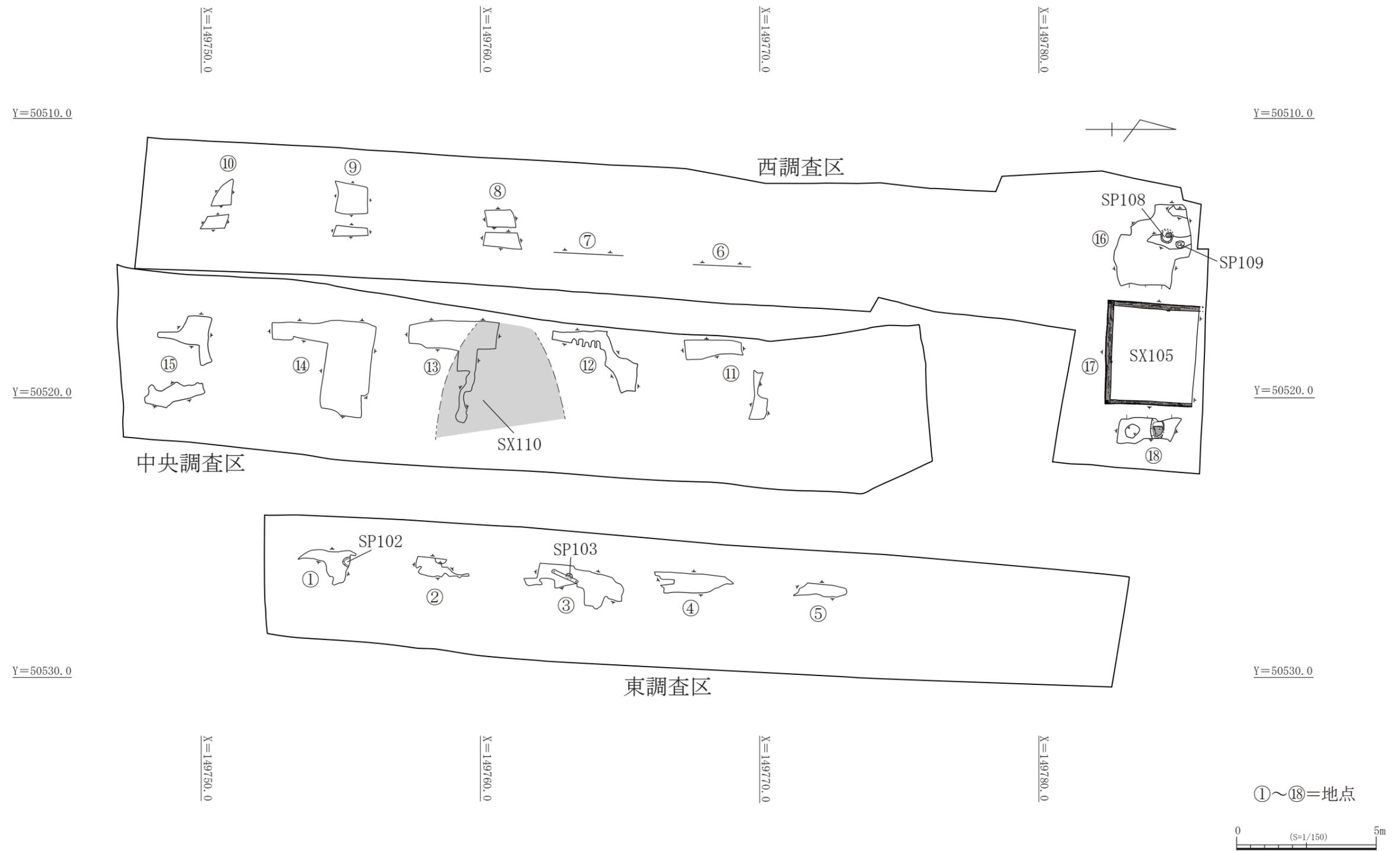
第1節 調査の方法

事前の試掘調査において、既存ビルの基礎により遺構面が削平された箇所と残存している箇所がモザイク状に分布していることが判明した。また試掘調査で確認された遺構面は現地表面から概ね1.0 mの深度であることから、遺構面が残存する範囲において、今回の開発計画であるマンションとエレベーターパーキング建設のうち1.0 mを超える深度の掘削部分を調査範囲とした。今回の発掘調査では、3つのブロックをトレンチ状に設定し調査を実施したことから、それぞれ西調査区、中央調査区、東調査区と称し、また、各調査区において島状に遺構面が残存する地点を1～18地点（ただし、6、7地点については既に攪乱され遺構面は残存しない。）と称し、現地調査を実施しており、本報告においてもこれらの呼称により記載するものとする。なお遺構番号については、調査時に101、102、・・・と検出された順番に番号を付けた。掘削の結果、現代の攪乱であることが明確になったものについては、欠番とした。また、SP（柱穴）、SX（性格不明遺構）の遺構の性格を示す略号については整理作業時に付けた。

発掘調査については、既存ビルの建設及び解体時の造成土を重機により掘削し、その後、人力により精査を行い、検出された遺構について人力掘削を行った。また試掘調査の結果、遺構面が複数存在することが考えられ、遺構の基盤層やその下の砂層等にも遺物が包蔵されていることから、遺構の調査後、基盤層を人力により掘り下げながら、適宜、遺構確認と遺物の取り上げを実施した。現地の記録については、4級基準点を3箇所設置して、これを基に1/20縮尺の平面図



第4図 調査の様子



第5図 全調査区遺構配置図 (S=1/150)

及び断面図を作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを主に用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また、補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

第2節 基本層序

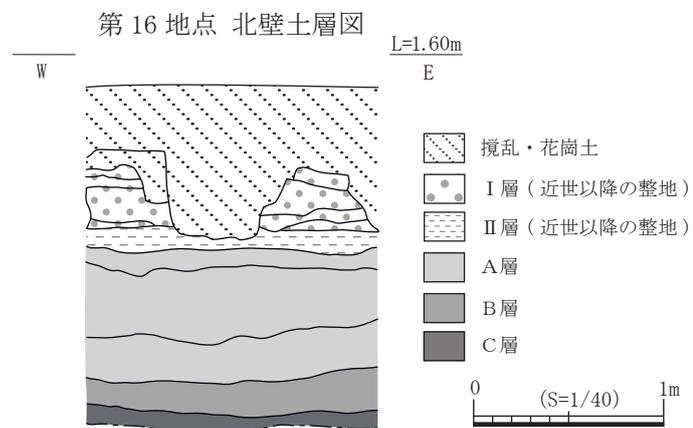
調査地の現地表面は、標高1.6m前後を測る。先述したように、当地はビルの跡地であり、地下構造物も解体により除去された状態で発掘調査を実施した。既存ビル建設時あるいは解体時のものと考えられる造成土は、標高0.4～1.1m付近まで及んでいた。

これに対して試掘調査で確認した遺構面は、地表面より1.0～1.3m下で認められる黄褐色シルト層であり、発掘調査では、この黄褐色シルト層について標高0.0～0.6mで認められる同様の堆積層をA層として、この上面で遺構確認を行った。また、これら造成土とA層との間には、調査地の北西部、西調査区第16地点における土層(第6図)のようにビル建設以前の整地層I・II層も一部残存していたため、造成土除去後、A層の上位で認められる整地上面においても随時、遺構確認を行った。

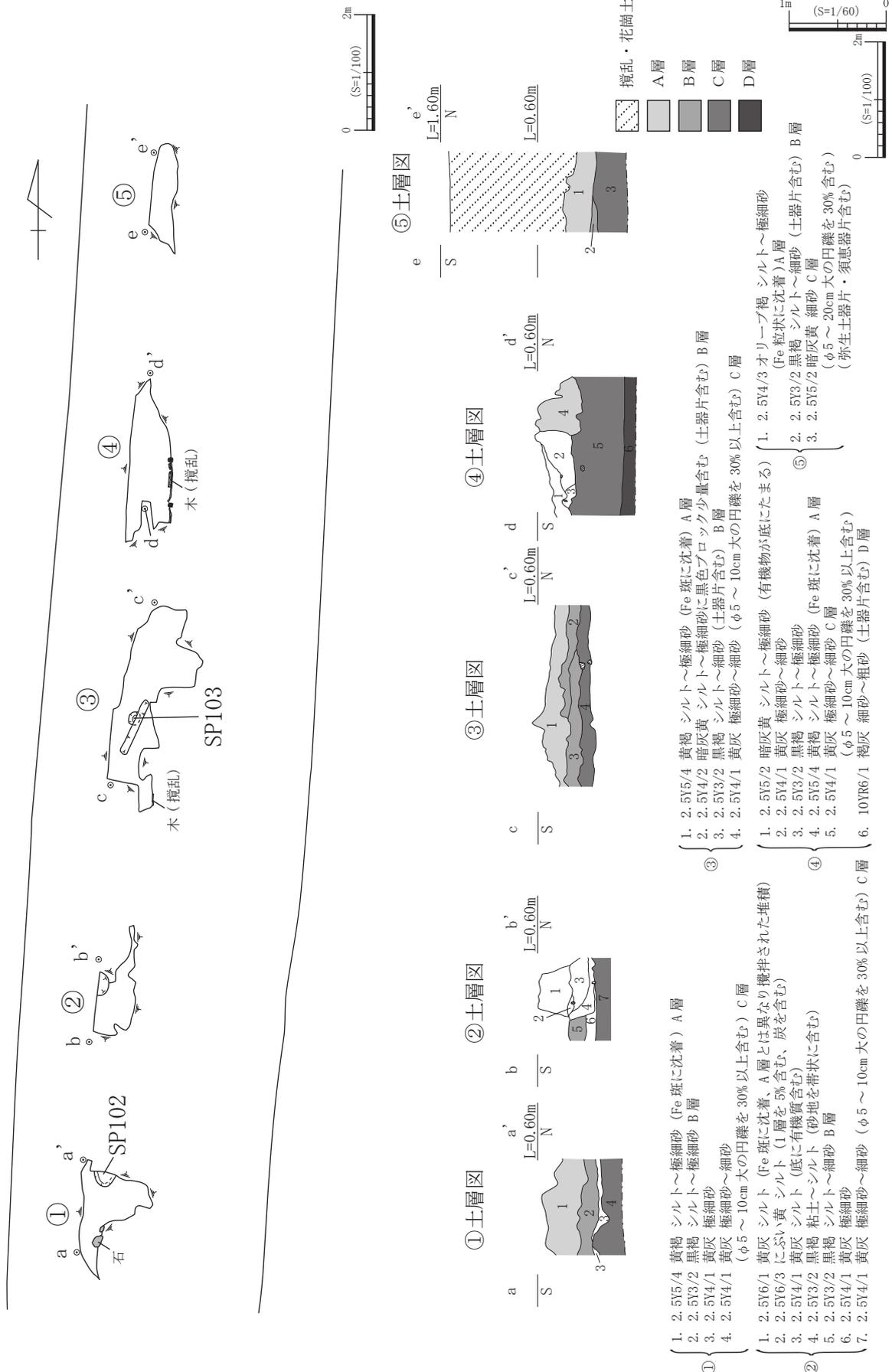
A層の下には、中世土器等の包含層で褐色土が混じるシルト層が0.2m前後の厚さで認められる。これをB層として、この上面とC層上面において遺構確認を行った。

C層は円礫を多く含む黄灰色砂層で、弥生土器等の遺物を包含している。標高-0.2m付近までC層が堆積し、その下は時期不明だが土器片を含む褐灰色砂層(D層)を4地点で確認した。なおC層以下における調査と遺構確認と遺物の取り上げについては、湧水が発生しない範囲で実施した。

確認した遺構は、造成土より下位でA層より上位の整地で検出したものに柱穴SP108、SP109、地下遺構SX105がある。A層を基盤として検出した遺構としては、試掘調査で確認したSX1、SX2、SK1の他、東調査区で柱穴SP102、SP103、中央調査区でSX110がある。その他、B層とC層を直接基盤とした遺構は検出されず、遺物の取り上げのみとなった。

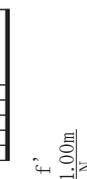
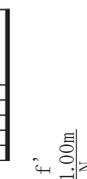
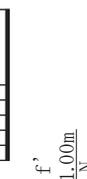
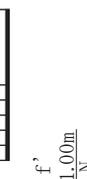
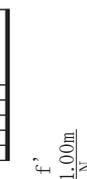
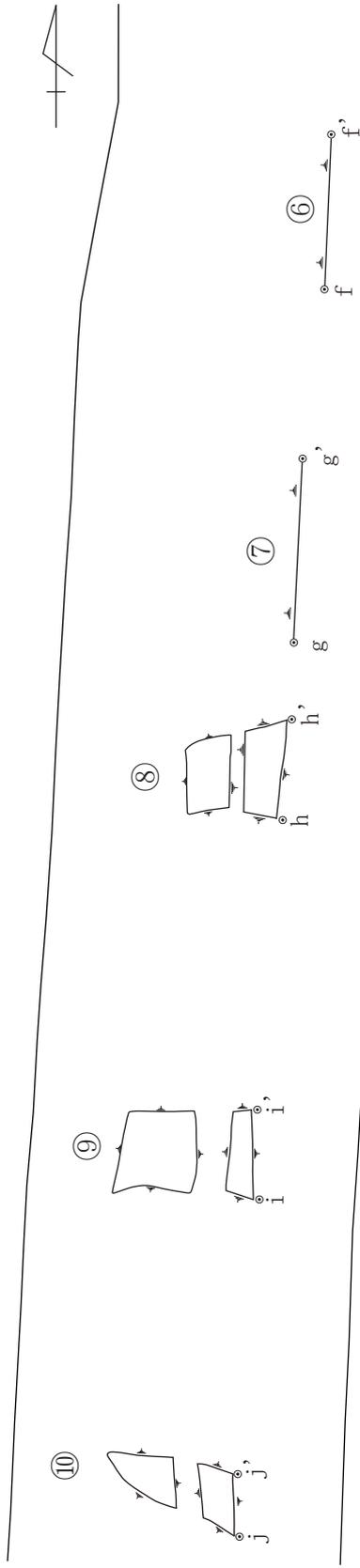


第6図 基本層序



- ①
- 1. 2.5Y5/4 黄褐シルト～極細砂 (Fe 斑に沈着) A 層
 - 2. 2.5Y6/3 に近い黄シルト (Fe 斑とは異なり攪拌された堆積)
 - 3. 2.5Y3/2 黒褐シルト～極細砂 B 層
 - 4. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂
 - 5. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 (φ5～10cm 大の円礫を30%以上含む) C 層
 - 6. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 (φ5～10cm 大の円礫を30%以上含む) C 層
 - 7. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 (φ5～10cm 大の円礫を30%以上含む) C 層
- ②
- 1. 2.5Y6/3 に近い黄シルト (Fe 斑に沈着、A 層とは異なり攪拌された堆積)
 - 2. 2.5Y4/1 黄灰シルト (底に有機質含む)
 - 3. 2.5Y4/1 黄灰シルト (底に有機質含む)
 - 4. 2.5Y3/2 黒褐シルト～シルト (砂地を帯状に含む)
 - 5. 2.5Y3/2 黒褐シルト～細砂 B 層
 - 6. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂
 - 7. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 (φ5～10cm 大の円礫を30%以上含む) C 層
- ③
- 1. 2.5Y5/4 黄褐シルト～極細砂 (Fe 斑に沈着) A 層
 - 2. 2.5Y4/2 暗灰黄シルト～極細砂に黒色ブロック少量含む (土器片含む) B 層
 - 3. 2.5Y3/2 黒褐シルト～細砂 (土器片含む) B 層
 - 4. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 (φ5～10cm 大の円礫を30%以上含む) C 層
- ④
- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄シルト～極細砂 (有機物が底にたまる)
 - 2. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂
 - 3. 2.5Y3/2 黒褐シルト～極細砂
 - 4. 2.5Y5/4 黄褐シルト～極細砂 (Fe 斑に沈着) A 層
 - 5. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂 C 層
 - 6. 10YR6/1 褐灰 細砂～粗砂 (土器片含む) D 層
- ⑤
- 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト～極細砂 (Fe 粒状に沈着) A 層
 - 2. 2.5Y3/2 黒褐シルト～細砂 (土器片含む) B 層
 - 3. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂 C 層 (φ5～20cm 大の円礫を30%含む) (弥生土器片・須恵器片含む)

第7図 東調査区平面図 (S=1/100)・土層図 (S=1/60, 1/100)



⑥土層図

⑦土層図

⑧土層図

⑨土層図

⑩土層図

$L=1.00m$
f' N

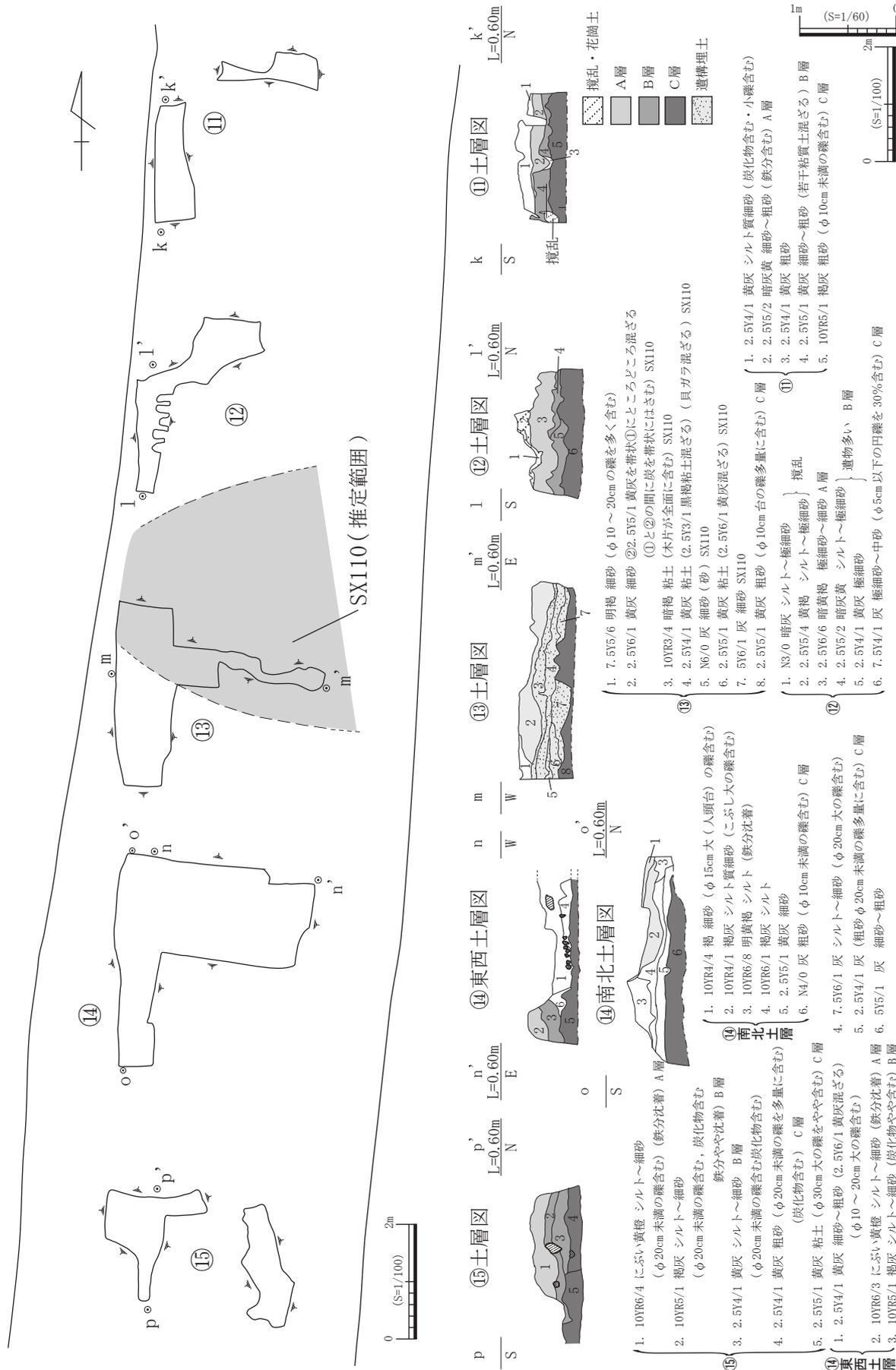
$L=1.00m$
g' N

$L=1.00m$
i' N

$L=1.00m$
j' N

- ⑥
 - 1-1 ~ 1-3. 褐色粘質土混搅乱土 (コンクリ等多く含む)
 - 2-1. N6/1 灰粘土~シルト (粗砂を多く含む)
 - 2-2. 2.5Y7/1 灰白 細砂~粗砂 ($\phi 5cm$ 以下の円礫を 30% 含む) C層
- ⑦
 - 1. 7.5Y5/1 黒 粘土主体の搅乱
 - 2. 2.5Y5/1 オリーブ灰 極細砂~細砂
 - 3. 10Y5/1 灰 粘土~シルト (細砂を多く含む)
 - 4. 2.5Y6/2 灰黄 細砂~中砂 ($\phi 5cm$ 以下の円礫を 20% 含む)
 - 5. N6/1 灰 粘土~シルト (粗砂を多く含む)
 - 6. 2.5Y7/1 灰白 細砂~粗砂 ($\phi 5cm$ 以下の円礫を 30% 含む) C層
- ⑧
 - 1. 7.5Y2/1 黒 粘土主体の搅乱
 - 2. N3/0 暗灰 シルト
 - 3. 5G2/1 緑黒 粘土
 - 4. 2.5G5/1 オリーブ灰 シルト~極細砂
 - 5. 2.5Y4/1 灰粗砂 ($\phi 20cm$ 未満の礫を多量に含む) C層
- ⑨
 - 1. 7.5YR3/1 黒褐 粘土主体の搅乱
 - 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト (Fe少量沈着)
 - 3. 2.5Y7/1 灰白 シルト (Fe粒状に沈着)
 - 4. 2.5Y7/1 灰白 シルト~極細砂 (Fe斑に沈着) A層
 - 5. 2.5Y6/4 におい黄 シルト~極細砂 (Fe・Mn少量沈着) A層
 - 6. 2.5Y4/1 黄灰 シルト~細砂 B層
 - 7. 2.5Y3/1 黒褐 粘土~シルト B層
 - 8. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 ($\phi 5cm$ 以下の円礫を 30% 含む) C層
- ⑩
 - 1. 2.5Y6/4 におい黄 細砂~極細砂
 - 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト~極細砂 (Fe斑状に沈着) A層
 - 3. 2.5Y6/2 灰黄 シルト~粗砂 (Feほとんど沈着せず) A層
 - 4. 2.5Y4/1 黄灰 シルト~粗砂 B層
 - 5. 2.5Y4/1 灰粗砂 ($\phi 20cm$ 未満の礫を多量に含む) C層

第 8 図 西調査区西側平面図(S=1/100)・土層図(S=1/60, 1/100)



第9図 中央調査区西側平面図(S=1/100)・土層図(S=1/60, 1/100)

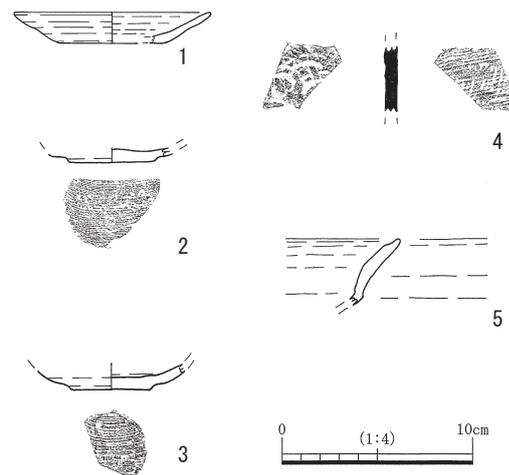
第3節 遺構・遺物

SX110 (第9図)

中央調査区第13地点で確認した性格不明遺構である。13地点の北半から12地点の間に広がっていると考えられるが、規模は不明である。A層を切り込んで構築され、標高0～0.45m付近で砂と粘土の互層が埋土として認められたものである。埋土は上位から拳大の礫を含む砂層、炭を帯状に含む砂層、中位に薄い木片をかなり多く含んだ粘土層、貝殻や黒色化した有機物を含む粘土層、下位に砂と粘土の互層が認められる。このような埋土の状態から水流があつて滞水した状態で、有機物を中心とした廃棄がなされたと推定される。木片の取り上げについては、土との分離ができなかった。その他、出土遺物には中世土器や須恵器、弥生土器があるが、近世では土師質土器皿が数点ある。この皿の底部切り離し技法が静止糸切りであることから、高松城編年(佐藤2003)における様相1～3にあたり17世紀前半の遺物と考えられるが、後に記述するように基盤層のA層が様相3に相当することから、遺構の時期としては17世紀前半の中でもより新しい時期に掘削され埋没したと考えられる。

SX110 出土遺物 (第10図)

1は土師質土器皿である。口縁が大きく開く。2・3は土師質土器皿の底部で、静止糸切り痕が認められる。4は須恵器の体部である。外面にタタキ痕、内面に青海波文が認められる。5は弥生土器高杯の口縁部である。長く伸びて外傾する口縁で、内面に連続する強い横ナデ痕が認められる。



第10図 SX110出土遺物実測図(S=1/4)

SP102 (第11図)

東調査区第1地点で確認した柱穴跡である。標高0.38m前後、A層を基盤として検出した。北半分は失われているが、平面は0.4m前後の円形あるいは隅丸方形になると推定される。深度は0.35mを測り、中央部が径0.15m、深度0.1m程度、段掘りされている。埋土は3層に分割されるが、上位の炭を含むシルト層の断面形状は柱材の抜き取り痕を示すものと考えられる。出土遺物はない。時期についてはA層を基盤としていることから17世紀前半以降で、A層上面までの出土遺物から19世紀代までの時期が考えられる。

SP103 (第 11 図)

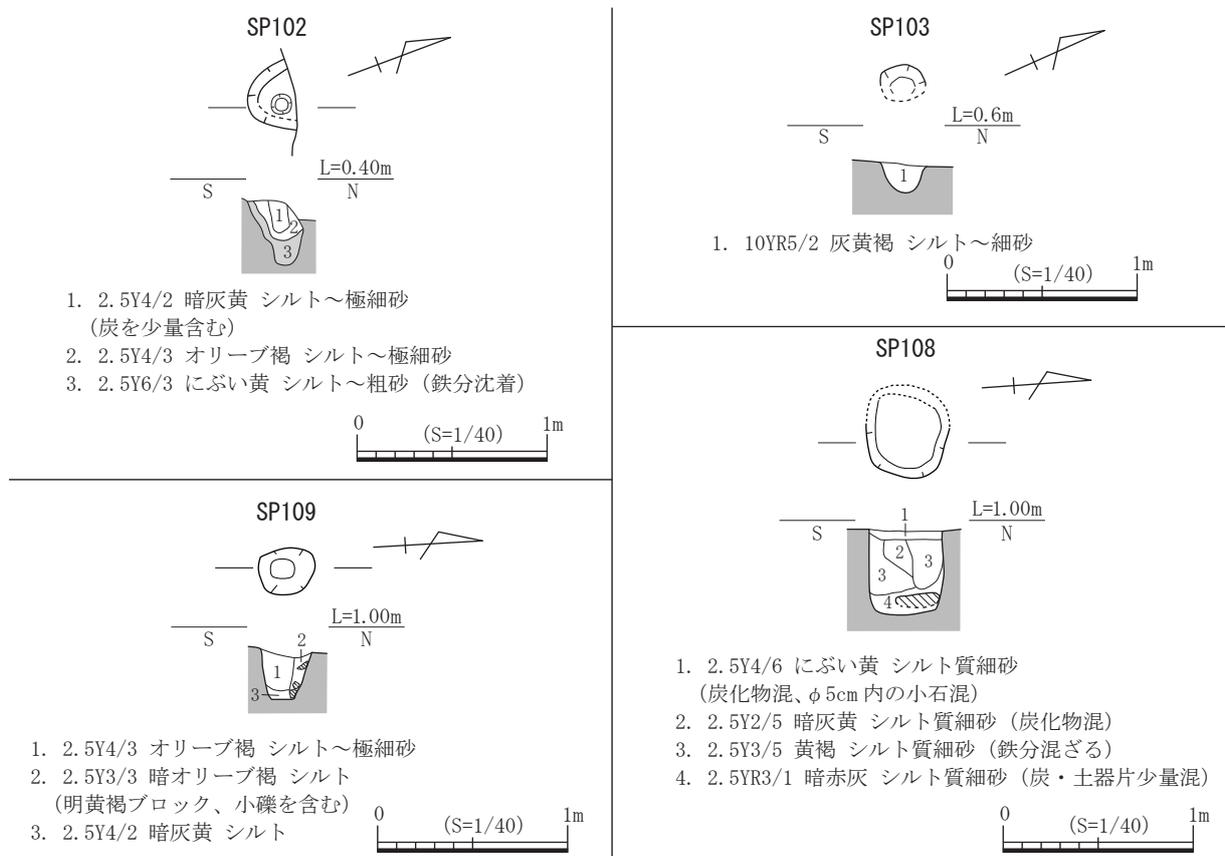
東調査区第 3 地点で確認した柱穴跡である。標高 0.4 m 前後、A 層を基盤として検出した。東半分は失われているが、平面は 0.25m 前後の円形になると推定される。深度は 0.15m を測る。埋土は単層で、出土遺物はない。時期については A 層を基盤としていることから 17 世紀前半以降で、A 層上面までの出土遺物から 19 世紀代までの時期が考えられる。

SP108 (第 11 図)

西調査区第 16 地点で確認した柱穴跡である。標高 0.95 m 前後、造成土より下位で A 層上位に認められる整地層を基盤として検出した。西半分が失われているが、平面は 0.4 ~ 0.5m 前後の隅丸方形になると推定される。深度は 0.45m を測り、底には根石が認められる。根石は北よりに置かれているが、その上位の埋土の断面形状 (3 層) が太さ 0.15m 程の柱材の抜き取り痕となっている。底付近で炭とともに少量の土器片が出土した。少量の出土遺物のため詳細な時期は不明であるが、後に記述するように造成土より下位で A 層より上位の整地層における出土遺物から 19 世紀代以降の時期が考えられる。

SP109 (第 11 図)

西調査区第 16 地点で確認した柱穴跡である。標高 0.9 m 前後、A 層上位に認められる整地層を基盤として検出した。平面は 0.3m 前後の円形で、深度は 0.3m を測る。埋土は南壁に沿って太



第 11 図 SP102・SP103・SP108・SP109 平・断面図 (S=1/40)

さ約 0.15m 程の柱材の抜き取り痕と考えられる断面形状(1)が認められる。反対側の北壁に沿っては小礫を詰めた堆積(2)が認められる。出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、後に記述するように造成土より下位で A 層より上位の整地層における出土遺物から 19 世紀代以降の時期が考えられる。

SX105 (第 12 図)

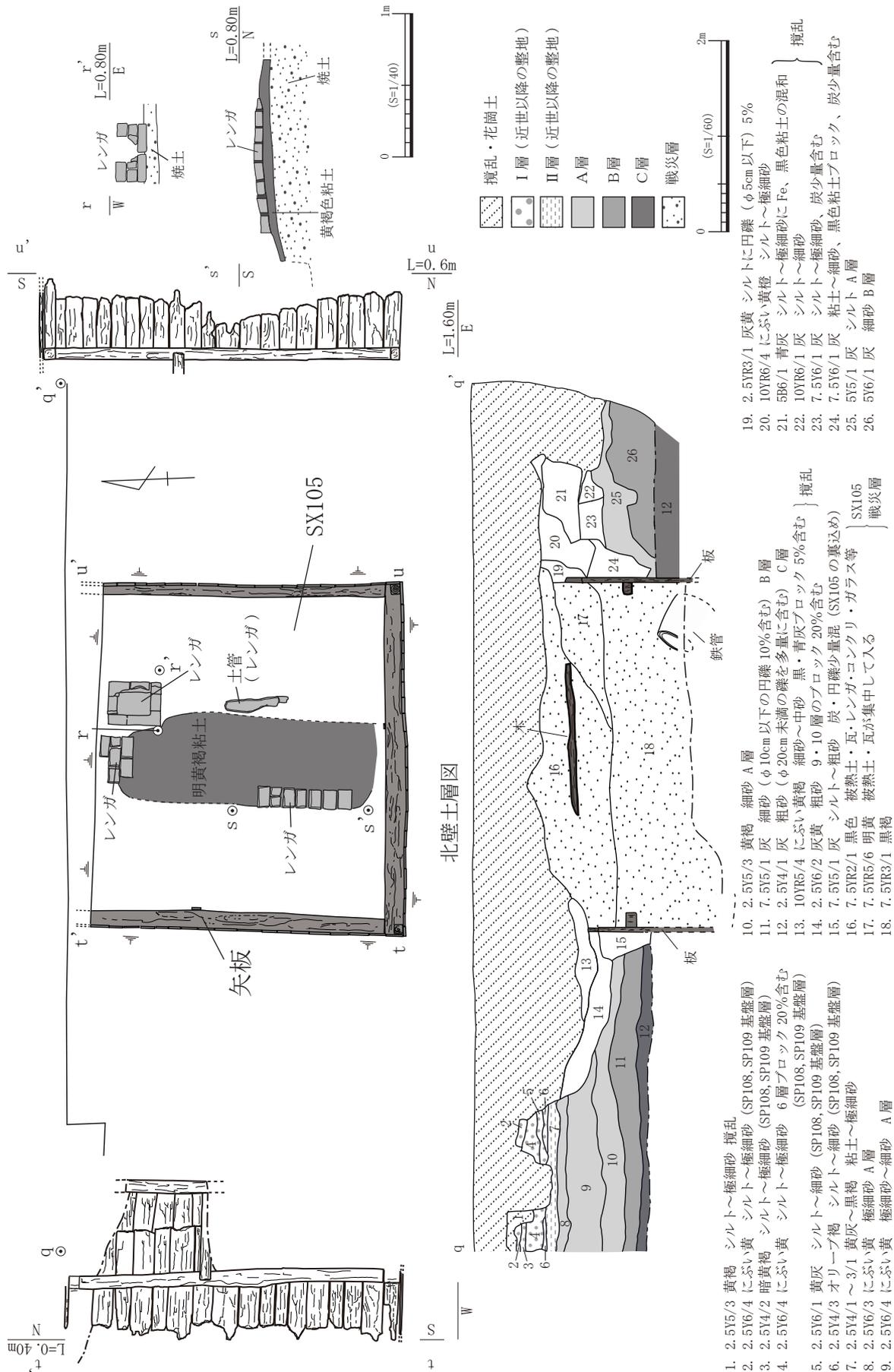
西調査区第 17 地点で確認した性格不明遺構である。表土の直下、標高 0.3～0.8 m において検出した。壁面に土留用と考えられる木枠が認められ、平面の規模は木枠の内法で東西方向が 3.3m、南北方向は 3.3m 以上を測り、形状は方形を呈している。木枠は幅 0.15～0.25m、長さ 1m 以上の縦板を並べたものに横木として 0.15～0.2m の角材で固定している。確認できた範囲では、縦板と横木は少なくとも 2 段あったと考えられる。また、2 箇所て上下の横木を内側から縦板で固定した箇所が認められる。底面までは確認していないため深度は不明だが、確認した範囲からは 1.8m 以上になる。埋土は焼土や被熱した瓦、金属など戦災層で充填されていた。本来の遺構の用途は不明だが、戦災処理の廃棄場として転用されたものと考えられる。確認状況及び出土遺物から大正一昭和 20 年までの時期が考えられる。

SX105 焼土層出土遺物 (第 13・14 図)

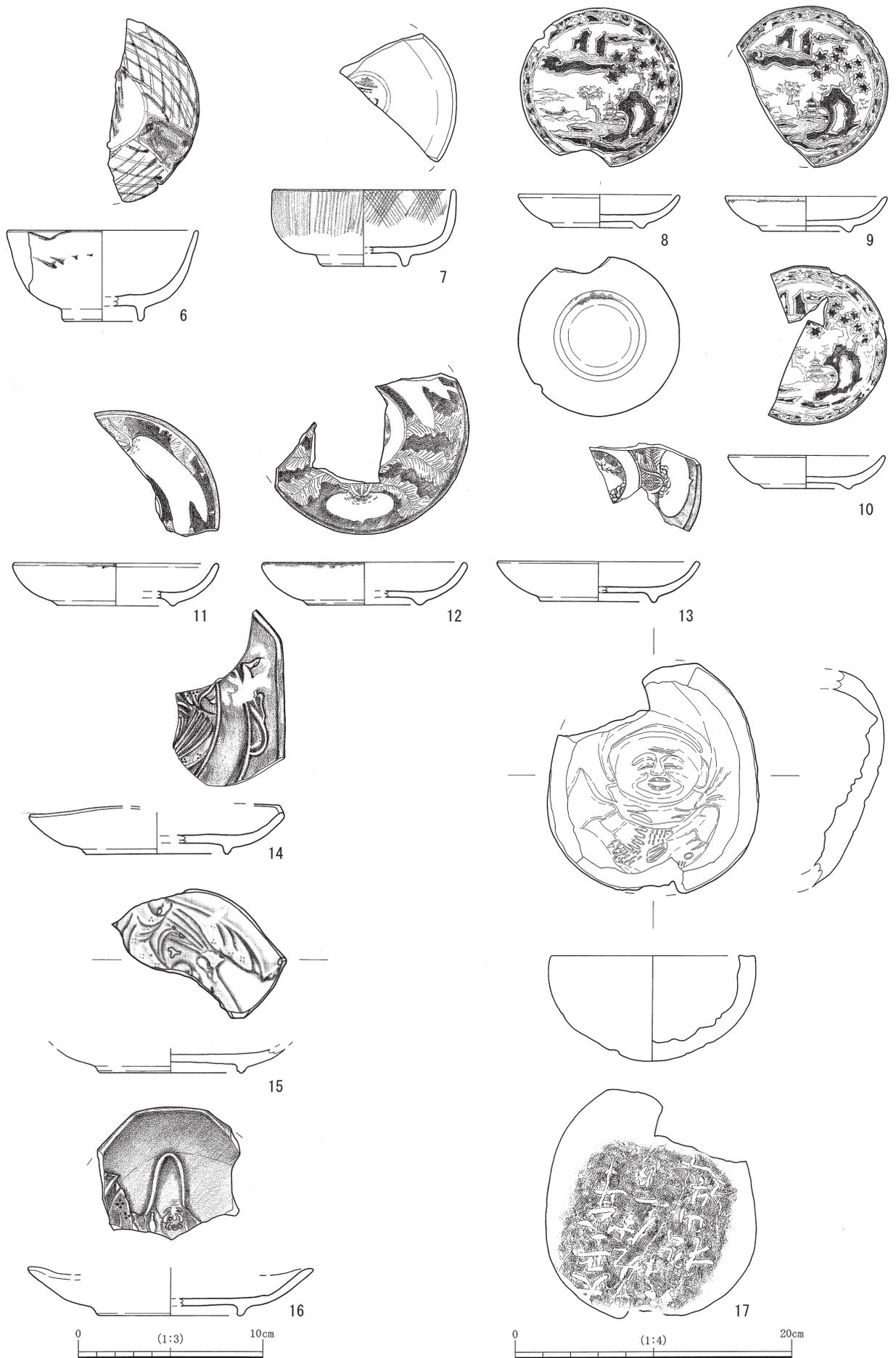
6～28 は、105 の埋土である焼土層から出土した遺物である。

6 は染付文様の磁器鉢である。口縁部は型打ち整形によって輪花に作られている。7 は磁器碗である。器高は低く筒型を呈する。口紅と体内内外面には緑色の染付文様が認められる。見込みの染付文は呉須で「壽」の文字を描いたものと考えられる。8、9、10 は同形の磁器皿である。口紅を施した小形の丸皿で、楼閣山水を描いた組皿と考えられる。11、12、13 も同形の磁器皿である。口紅を施した中形の丸皿で、蕪を主文として描いた組皿と考えられる。14、15、16 は型によって整形された陽刻文の青磁皿である。17 は土型である。内面に恵比寿を彫り込んだ型押し用の外型と考えられる。外面には「大正六年 九月一日 松山造」の刻書が認められる。18 は軒棧瓦の丸部である。凹面に格子状のタタキ痕が認められる。19、20、21、22、23、24、25 は、軒平瓦あるいは軒棧瓦の軒平部である。19 の瓦当面に「高松 岡野屋」の刻印が、凸面には格子状のタタキ痕が認められる。20 は列点状に並んだ葉文を瓦当文にしている。21 は宝珠を中心飾りにした唐草文である。22、23、24 の瓦当には文様が認められない。また 22、23、24、25 の瓦当面に「高」、「高松 岡野屋」、「瓦 岡野屋」、「落合 横倉」の刻印がそれぞれ認められる。26 は棧瓦である。端面に「岡」の刻印が認められる。27、28 は平瓦あるいは棧瓦の平部である。端面に「清」、「岡」の刻印がそれぞれ認められる。

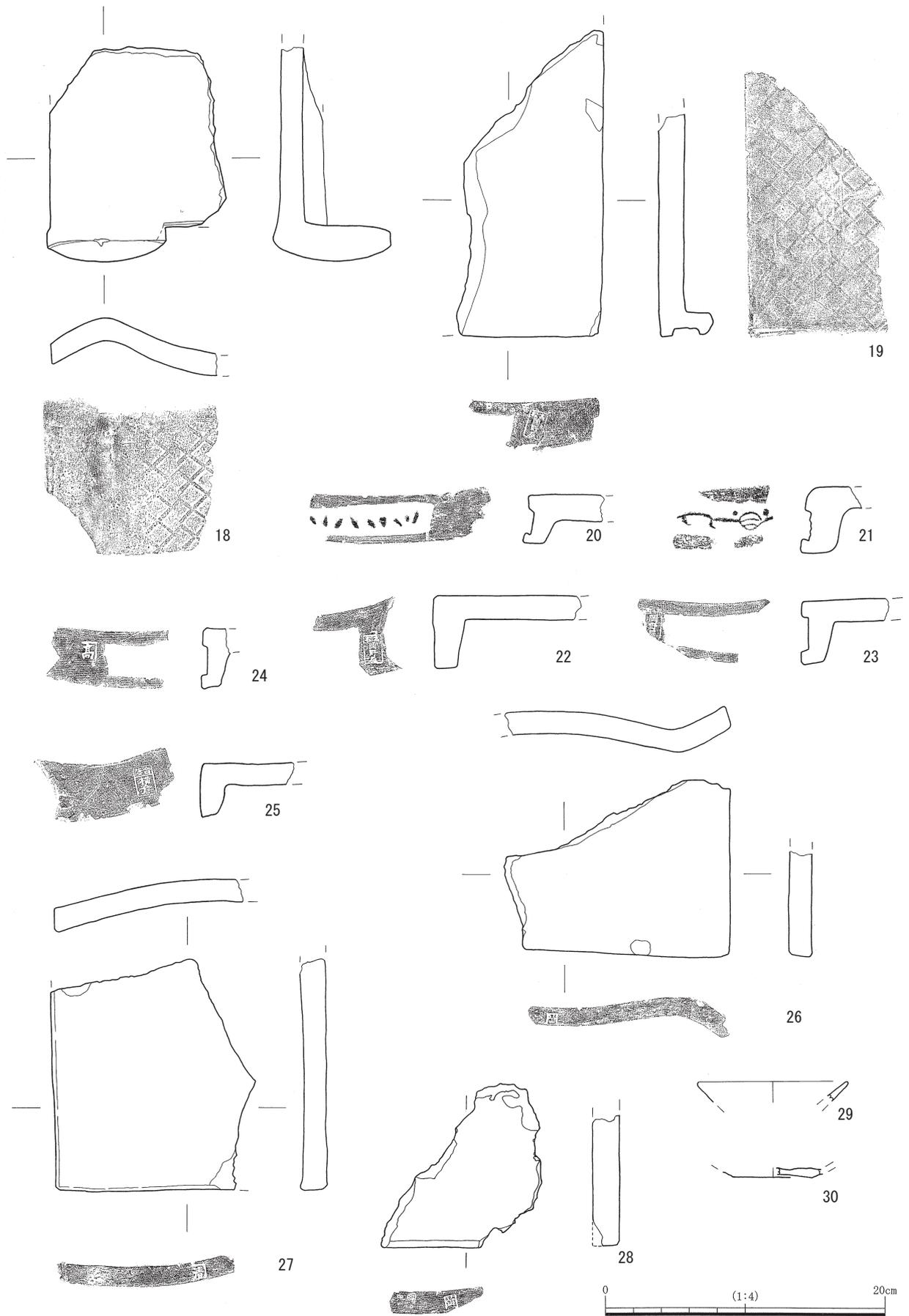
29 と 30 は SX105 木枠の裏込めから出土した遺物である。29、30 は土師質土器で、皿あるいは杯の口縁部と底部である。30 の底部には回転糸切り痕が認められる。



第 12 図 西調査区 SX105 平面図・北壁土層図 (S=1/60)・断面図 (S=1/40)



第13图 SX105 出土遺物実測図 (6 ~ 16 S=1/4 · 17 S=1/3)



第14図 SX105出土遺物実測図(S=1/4)

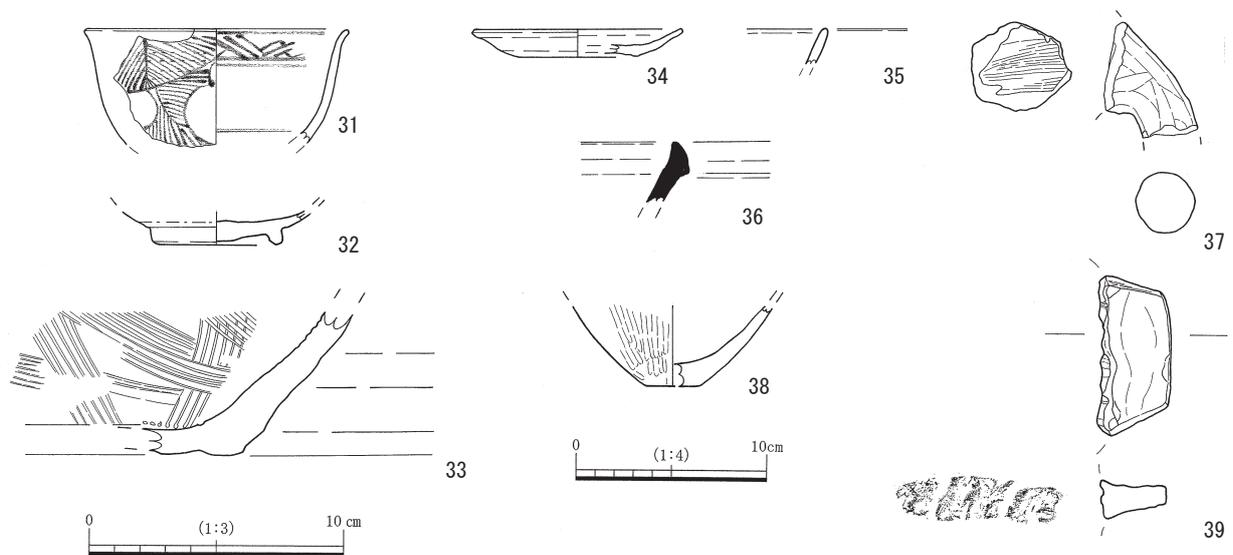
造成土より下位でA層より上位の整地出土遺物（第15図）

31は東調査区第2地点の出土遺物で、肥前系磁器の端反り碗である。32、33は中央調査区第14地点の出土遺物である。32は肥前系陶器碗あるいは皿の底部である。33は、備前系陶器播鉢の底部である。間隔が空いて斜め方向の播目である。34は中央調査区第11地点の出土遺物で、土師質土器皿である。長く外傾する口縁部で、底部に静止糸切り痕が認められる。35は西調査区第16地点、SP108の基盤層から出土した遺物で、土師質土器の口縁部である。36は中央調査区第14地点の出土遺物で、須恵質土器鉢の口縁部である。口縁端部を上下方向に小さく拡張する。37は西調査区第16地点の出土遺物で、土師質土器足釜の脚部である。内面にハケメが認められる。38は中央調査区第14地点の出土遺物で、弥生土器甕の底部である。内面は摩滅し調整は不明である。外面はヘラミガキが認められる。39は中央調査区第14地点の出土遺物で、土師器の把手部である。接合部に刻み目が認められる。

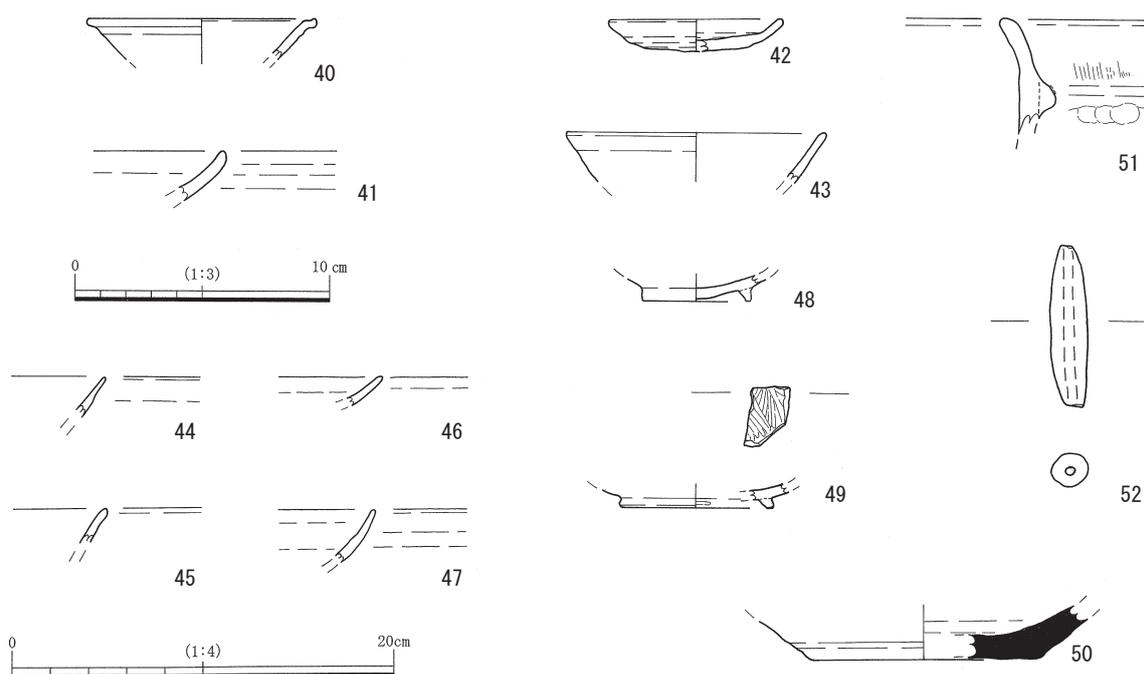
A層上面までの出土遺物については各地点での様々な整地層を含んでいるが、時期については下位のA層の時期から17世紀前半以降であり、31～35がこの時期に該当する。このうち最も新しい31の端反り碗は松本2002の様相8、9にあたることから、19世紀代までの整地と考えられる。

A層出土遺物（第16図）

40は西調査区第18地点の出土遺物で、肥前系陶器の溝縁皿である。41は中央調査区第15地点の出土遺物で、肥前系陶器皿である。42は西調査区第16地点の出土遺物で、土師質土器皿である。外傾する短い口縁で、端部が肥厚する。底部に静止糸切り痕が認められる。43は西調査区第16地点の出土遺物で、須恵質土器碗あるいは杯の口縁部で、口縁端部に重ね焼き痕が認められる。44～47は西調査区第16地点の出土遺物で、土師質土器の口縁部である。どの個体も残存率が小さい。48は中央調査区第15地点の出土遺物で、土師質土器碗の底部である。49は西調査区第16地点の出土遺物



第15図 造成土より下位でA層より上位の整地出土遺物実測図（31～33 S=1/3・34～39 S=1/4）



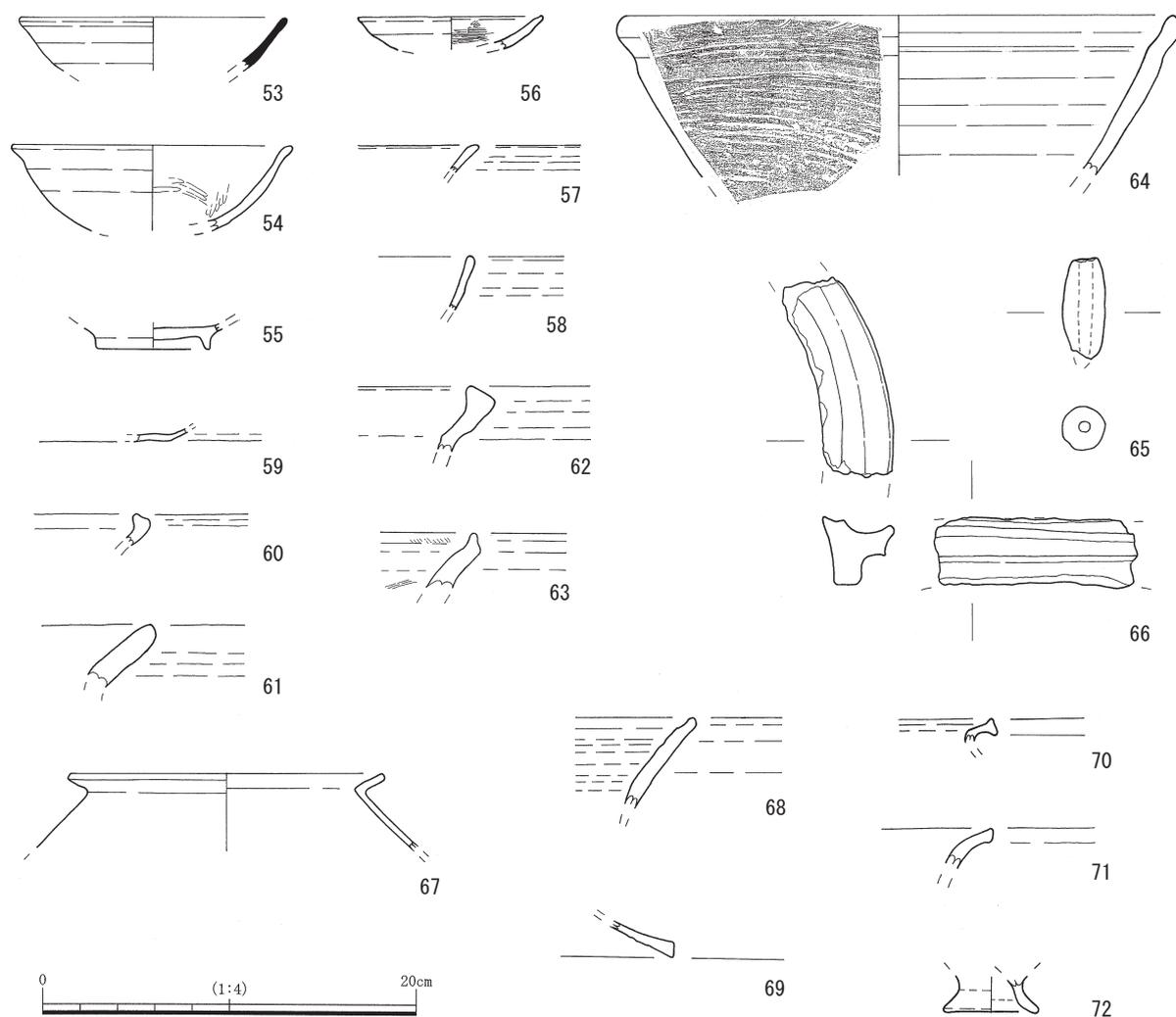
第 16 図 A 層出土遺物実測図 (40, 41 S=1/3・42～52 S=1/4)

で、黒色土器碗である。内黒の焼成で、内面に幅 3mm 程度のヘラミガキが認められる。高台の断面は台形状を呈する。50 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、須恵質土器鉢の底部である。外面に回転ヘラケズリ痕が認められる。51 は中央調査区第 15 地点の出土遺物で、土師質土器足釜の口縁部である。鏝が退化して瘤状になっている。52 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、有孔土錘である。長さ 4.3 cm、幅 0.95 cm、孔径 0.3 cm を測る。

A 層の時期については、中世土器が多く混在しているが、40～42 が松本 2002、佐藤 2003 の様相 3 に相当することから、17 世紀前半の堆積層と考えられる。

B 層出土遺物 (第 17 図)

53～55 は西調査区の出土遺物で、53 は須恵質土器碗あるいは杯の口縁部である。54 は土師質土器碗の口縁部である。内面にヘラミガキが認められる。55 は土師質土器碗の底部である。高台は断面が三角形を呈する。56 は中央調査区第 15 地点の出土遺物で、瓦器皿である。内面にヘラミガキが認められる。57 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、土師質土器の口縁部である。58 は中央調査区第 15 地点の出土遺物で、須恵質土器の口縁部である。59 と 60 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、59 は土師質土器杯あるいは皿の底部である。60 は土師質土器鉢の口縁部である。61 は中央調査区第 14 地点の出土遺物、62、63 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、それぞれ土師質土器鍋の口縁部と考えられる。63 の外面には煤化が認められる。口縁端部は、61 が丸みを帯び、63 が上方に摘み上げている。62 は内弯して立ち上がる口縁部である。64 は西調査区の出土遺物で、須恵質土器鉢である。外面にはタタキ痕が認められる。65 は西調査区第 16 地点の出土遺物で、管状土錘である。孔径は 3mm を測る。表面は全体的に磨滅している。66 は西調査区の出土遺物である。竈の一部と考えられるもので、底部がない輪状の土師質土器である。



第 17 図 B 層出土遺物実測図 (S=1/4)

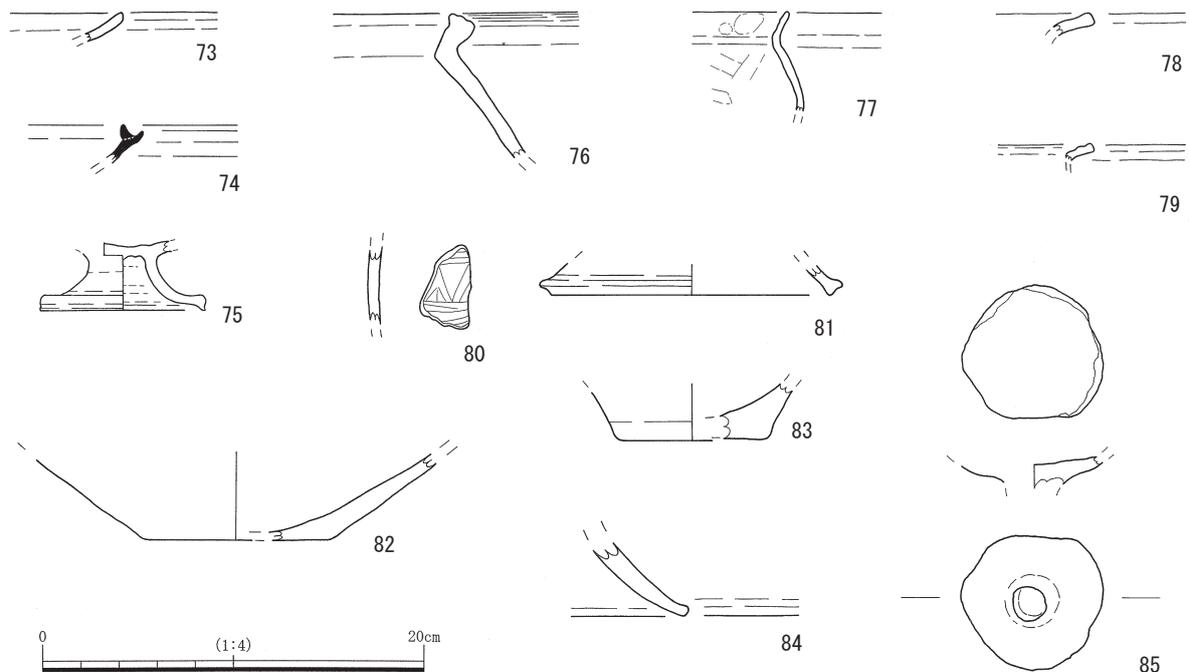
径も不明だが大形で、円あるいは楕円形になると考えられる。内外面はナデ調整で、外面には罫が付いている。67～69は中央調査区第12地点の出土遺物である。67は弥生土器甕である。「く」の字に折れ曲がる口縁部で、胎土中に角閃石が認められる。68は弥生土器高杯の口縁部である。長く伸びて外傾する口縁で、内面に連続する強い横ナデ痕が認められる。69は弥生土器高杯の脚部で、胎土中に角閃石が認められる。70は中央調査区第15地点の出土遺物で、弥生土器甕の口縁部である。胎土中に角閃石が認められる。71は西調査区第16地点の出土遺物で、弥生土器壺の口縁部である。72は中央調査区第12地点の出土遺物で、製塩土器脚部である。外面に煤が付着している。

B層は弥生土器が混在する中世土器の包含層であるが、時期については54と55の土師質土器碗、64の須恵質土器鉢（佐藤2000、鉢D-4）、56の瓦器は13世紀前半、62の鍋（佐藤1995、鍋B）は14世紀代と推定される。

C層出土遺物（第18図）

73は中央調査区第14地点の出土遺物で、土師質土器の口縁部である。74は西調査区第18地点の出土遺物で、須恵器杯身の口縁部である。口縁の立ち上がりが低いことから、田辺編年Ⅱ期（TK209）～Ⅲ期（TK217）形式併行期と考えられる。75は西調査区北端の出土遺物で、須恵器高杯あるいは台付き椀の脚部である。低脚で透かしがない。概ね田辺編年Ⅱ期（TK209）～Ⅲ期（TK217）形式併行期と考えられる。76と77は西調査区北端の出土遺物で、弥生土器甕の口縁部である。76は口縁部に凹線文が認められる。77は胎土中に角閃石が認められる。78と79は弥生土器甕の口縁部で、胎土中に角閃石を含むものである。78は中央調査区第11地点、79は西調査区第18地点の出土遺物である。80は中央調査区第12地点の出土遺物で、弥生土器の破片である。外面に鋸歯文が認められる。81は中央調査区第12地点の出土遺物で、弥生土器高杯の脚部である。端面に強いナデを行い、上方向に拡張している。82と83は西調査区第8地点の出土遺物で、弥生土器壺と甕の底部である。82は底部から体部へと大きく開く。83の甕底部は、厚底で胎土中に粗い砂礫を多く含む。84は中央調査区第13地点の出土遺物で、弥生土器高杯の脚部である。85は西調査区第10地点の出土遺物で、弥生土器高杯の杯部である。胎土中に角閃石が認められる。

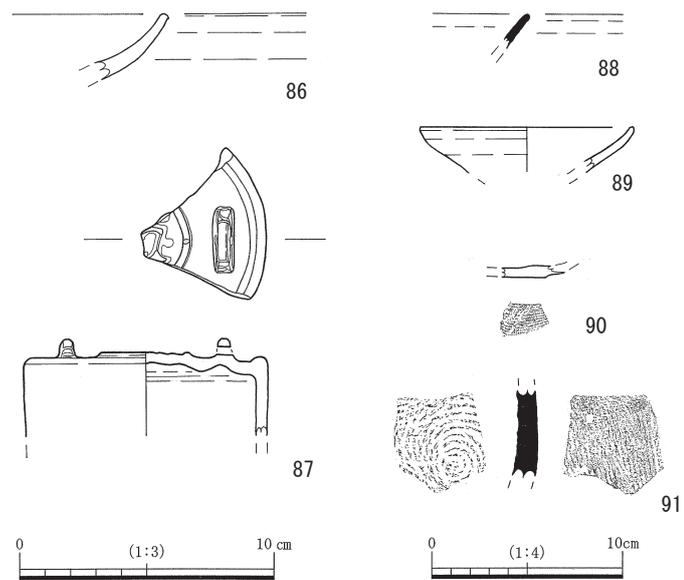
C層の出土遺物については大きく分けると弥生時代後期、7世紀前半、中世の時期のものが認められる。発掘調査ではこれらの時期に対応してC層を分割できなかったが、本来、C層は洪水層と考えられることから、出土遺物に対応する幾度かの洪水により形成された堆積層である可能性が考えられる。



第18図 C層出土遺物実測図 (S=1/4)

攪乱等出土遺物（第19図）

86は肥前系陶器で、皿の口縁部である。87は陶器香炉の蓋である。88は中央調査区第14地点の層位不明で出土した須恵質土器の口縁部である。89は土師質土器で、椀あるいは杯の口縁部である。90は土師質土器で、杯あるいは皿の底部である。静止糸切り痕が認められる。91は須恵器の体部である。外面にタタキ痕、内面に青海波文が認められる。



第19図 攪乱出土遺物実測図（86, 87 S=1/3・88～91 S=1/4）

—参考文献—

- 佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
- 菅原康夫・梅木謙一 2000 『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
- 大橋康二ほか 2000 『九州陶磁の編年 九州陶磁学会 10周年記念』九州陶磁学会
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺部における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会
- 松本和彦 2002、佐藤竜馬 2003 「高松城編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 高松城跡（西の丸地区）Ⅱ、第5冊 高松城跡（西の丸地区）Ⅲ』香川県教育委員会

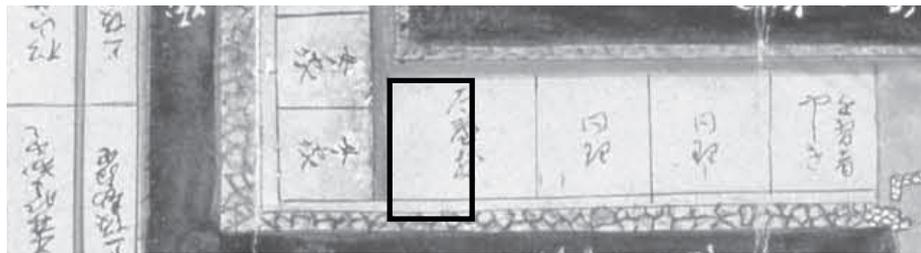
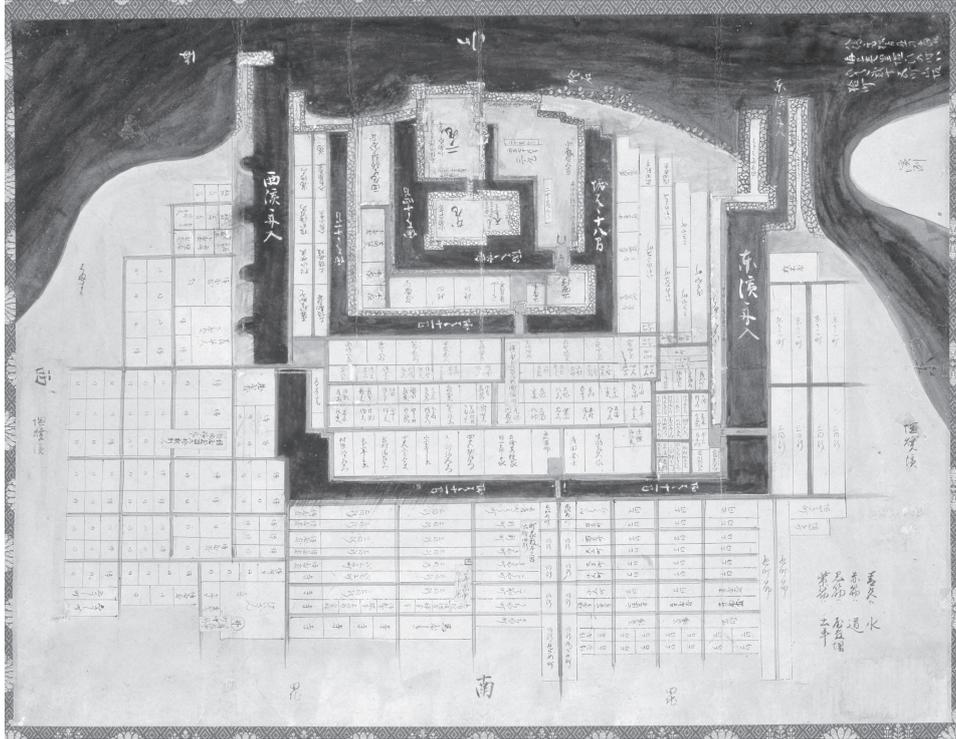
第Ⅳ章 まとめ

高松城跡については、史跡指定により現状で保存された区域がある一方で、早くに市街地化されたために現況では城跡の状況が不明で、本例のように開発事業に際して、発掘調査により記録保存となったものもある。これまで高松城跡における築城以前からの土地の履歴が、第Ⅱ章で述べたとおり、各地点での発掘調査によって明らかにされている。これらの成果や絵図などの資料を踏まえながら、以下、今回の発掘調査で判明した遺跡の構造及び時期的変遷を評価し、本書のまとめとする。

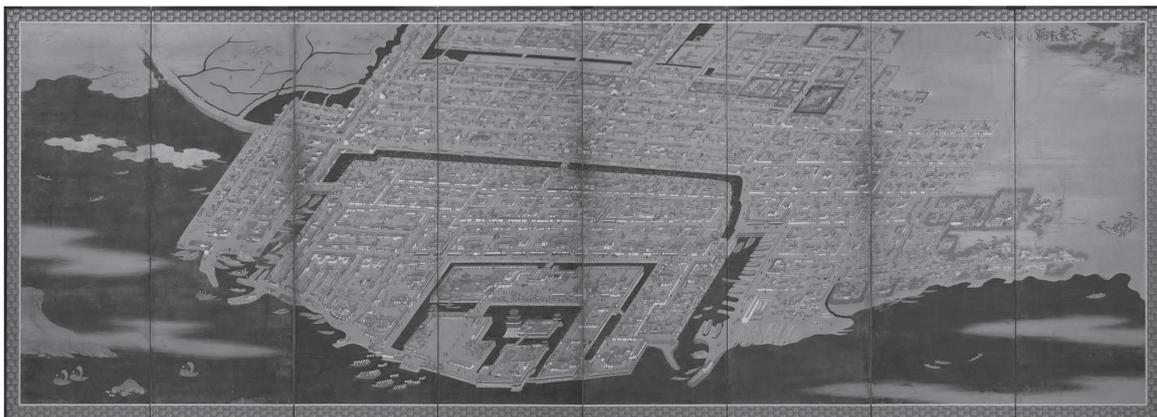
はじめに遺跡の基盤層については、海拔高の以下に至るまで砂礫であったことから、河口の堆積物によって基盤になる地面が形成されたことが分かる。地形としては海辺の河口付近であり、砂礫層の出土遺物から、弥生時代から中世に至る時間の中で、本遺跡の地面が徐々に形成され、その後、次第に河川の活発な活動を示す砂礫の堆積は見られなくなり、安定した環境になっていったと考えられる。砂礫層の上層では、13～14世紀代の遺物包含層が確認された。遺構は検出されなかったが、周辺の西の丸地区（*1）は11～13世紀の湊が確認され、瓦器など他地域から搬入された物資の集積場と想定され、また当地点の南東方向に近隣する高松城跡丸の内地区（高松家庭裁判所（*1）や都市計画道路高松海岸線（*2））では、この時期の石組み井戸が確認されており、位置関係や時期から、これらの湊や集落との関連でもたらされた遺物と考えられる。一方で北西方向に近接している高松城跡寿町一丁目地区（無量寿院跡）においては、16世紀代の築城前に存在した寺跡が確認されているが、今回の調査地点では寺に関係する遺構及び遺物だけでなく、この時期に該当するものは確認されていない。今後、周辺状況の資料の蓄積が必要であるが、この結果は寺域を推定する上で、ひとつの資料となるだろう。

次に中世の遺物包含層の上位では、黄褐色を呈する安定したシルト層が調査地の南部を中心に広がっていることが確認された。このシルト層上面で検出した17世紀前半の性格不明遺構であるSX110は、木片や有機物を含むことから滞水した池状の遺構であったと考えられる。この頃の調査地の様子については、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（第20図）、『高松城下図屏風』（第21図）により窺うことができる。絵図との位置関係については、調査地は現在においても本丸の地久櫓から内堀を挟んで南西方向に位置し、当時は内堀の南西角の南側に相当する場所であったと考えられる。これによれば、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では「局屋敷」と記載された藩主に近い人物の屋敷、『高松城下図屏風』でも上級家臣の屋敷であったように描かれている。SX110として検出した池状の遺構は、確認範囲が限られていたため断定できないが、上記の屋敷に伴う遺構の可能性がある。

17世紀前半の遺構面より上位については、北部のSX105周辺を中心に19世紀代までの整地を確認した。この時期に相当する比較的しっかりとした柱穴跡が複数確認されたものの、城の中心部にあり、200年に及ぶ期間の遺構としては希薄であり遺物の量も少ない。理由のひとつとして考えられるのは松平家時代の城の改修後の絵図にみられるように、桜の馬場が整備され公的な広場になったことから、遺構の形成や遺物の廃棄がなされ難い場へと変化したためで、17世紀前半の絵図に見られるような領主の館を家臣の屋敷が囲む中世的な城郭の配置をやめて、太平の時代の政庁としての場が変わったことによるものと推測される。確認した柱穴跡については、19世紀代の高松城を示すと考えられる『旧高松御城全図』（第22図）によれば、調査地は「櫻之

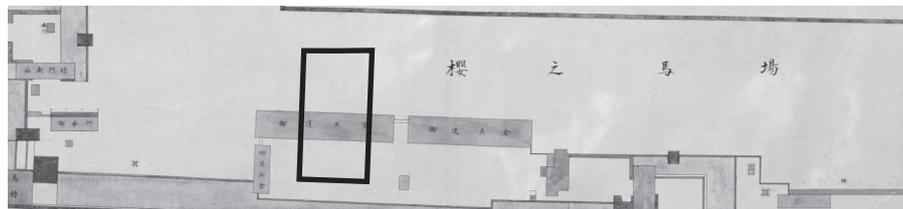
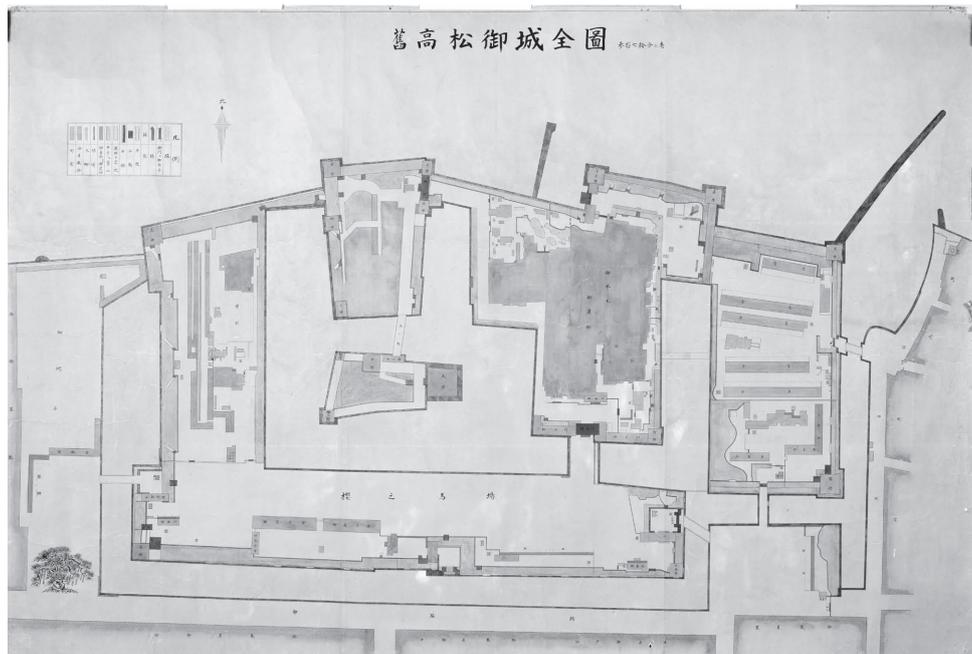


第 20 図 生駒家時代讃岐高松城屋敷割図（高松市歴史資料館所蔵）



第 21 図 高松城下図屏風（香川県立ミュージアム所蔵）

※太枠の範囲は調査地に比定される箇所



第 22 図 旧高松御城全図（香川県立ミュージアム所蔵）

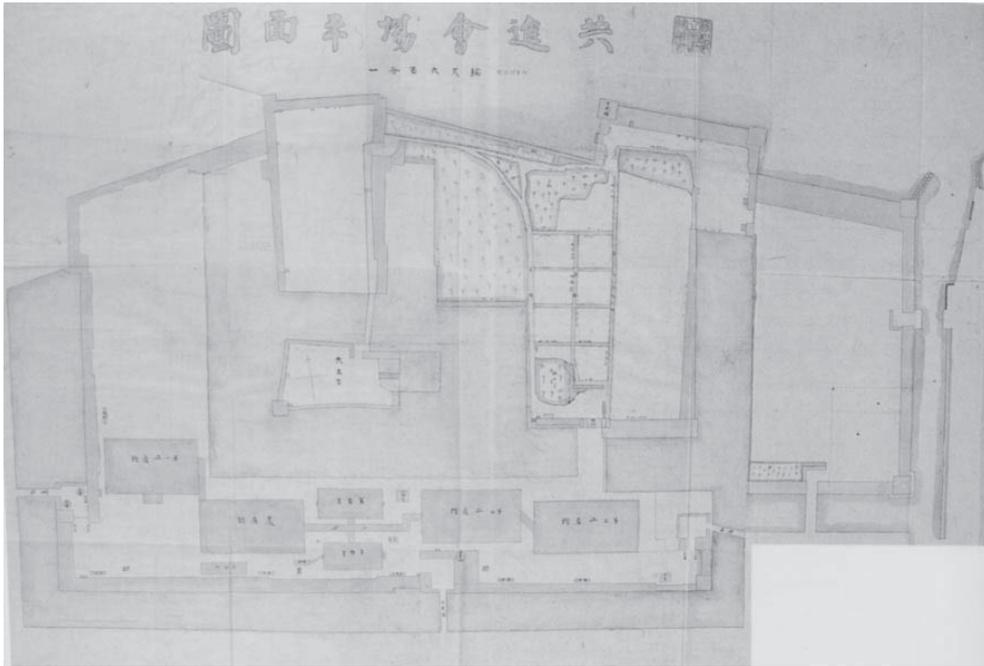
※太枠の範囲は調査地に比定される箇所

馬場」の南西部にあたる。この地点は絵図で「御道具倉」と描かれているが、今回の調査成果との対応関係は遺構の残存状況が良くなく不明である。

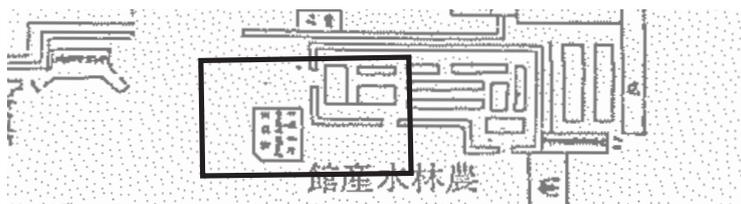
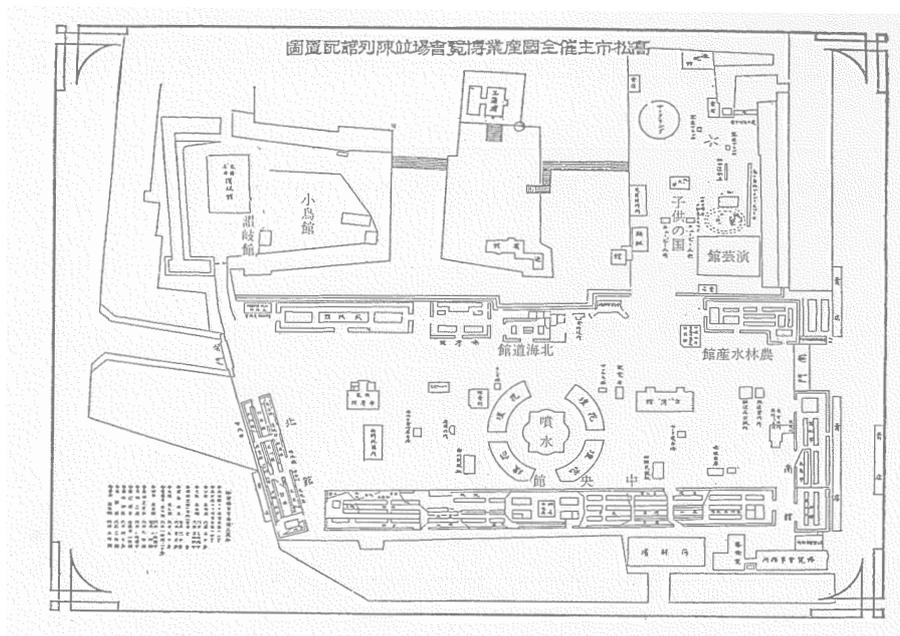
20 世紀に入ると調査地を含む桜の馬場の一部は城郭の機能を次第に失っていたと考えられる。明治 35 年の第 8 回関西府県聯合共進会に際しては (*3)、『共進会場平面図』（第 23 図）により、桜の馬場で新たに建物が建築されていたことが分かる。また、大正 14 年 (1925) の皇太子殿下 (昭和天皇) 御成婚記念道路として調査地の西側に幹線道路が建設され、町名も「寿町」となり、高松城周辺は様相を変化させていった。昭和 3 年 (1928) には、『全国産業博覧会』が開催され (*4)、当時の配置図 (第 24 図) から調査地は博覧会に関する建物が建築されていたことが窺える。その後、戦時下には桜の馬場は金属の供出場にもなったとされる。調査においては、このように城として使われなくなった大正～昭和期における地下施設をさらに戦災瓦礫の処理場に転用したと考えられる SX105 を検出している。

—参考・引用文献—

- (*1) 香川県教育委員会 2003 『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡 (丸の内地区)』
 - (*2) 高松市教育委員会 2016 『都市計画道路高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 冊 高松城跡 (丸の内地区)』
 - (*3) 香川県 1987 『香川県史 第 5 卷通史編 近代 I』
 - (*4) 高松市 1989 『高松百年史 上巻』
- 高松市 2014 図録『史跡高松城跡』



第 23 図 共進會場平面圖（高松市歴史資料館所蔵）



第 24 図 高松市主催全国産業博覽會場並陳列館配置圖
（高松市所蔵『高松市主催全国産業博覽會誌』から引用し一部改編して掲載）

※太枠の範囲は調査地に比定される箇所

第4表 出土土器観察表1

番号	調査区名	出土層名 遺構	種類 器種	部位	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面			
1	⑬	SX110 C層	弥生土器	底部	(10.4)	(5.6)	[1.6]	回転ナテ	回転ナテ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 2mm程度の赤色粒を含む	良	
2	⑬	SX110 木片層	土師質土器 皿	底部	—	(4.6)	[0.7]	ナテ 底部: 静止系切り	ナテ	2.5Y6/2灰黄	5Y7/2灰白	精良 砂粒をほとんど含まない	良	
3	⑬	SX110 木片層 上層	土師質土器 皿	底部	—	(4.2)	[4.2]	回転ナテ 底部: 静止系切り	回転ナテ	10YR7/3にぶい黄橙	2.5Y7/2灰黄	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
4	⑬	SX110 C層	須恵器	体部	—	—	[3.5]	タテのちナテ	青海波文	N5/0灰	N6/0灰	普 0.5~2mm程度の石英・長石を含む	良	
5	⑬	SX110 C層	弥生土器 高坏	脚部	—	—	[3.5]	ナテ	ナテ	10YR5/2灰黄褐 ~10YR4/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐 ~10YR4/2灰黄褐	普 1mm以内の石英・長石・黒雲母を含む	良	
6	⑰	SX105 焼土中	磁器 鉢	—	(10.2)	(4.2)	4.95	染付,施釉	染付,施釉	胎土: N8/0灰白,施釉: 透明,呉須: 明青・暗青	胎土: N9/0灰白,施釉: 透明,呉須: 明青・暗青	精良 砂粒をほとんど含まない	良	
7	⑰	SX105 焼土中	磁器 碗	—	(9.8)	4.2	(4.44)	回転ナテ→染付→ 施釉	回転ナテ→染付→ 施釉	胎土: N8/0灰白,施釉: 透明,口縁: 5YR2/2黒褐, 体部: 青緑	胎土: N8/0灰白,施釉: 透明,呉須: 薄青	密	良	
8	⑰	SX105 焼土中	磁器 碗	—	8.7	1.8	5.0	施釉,砂目	染付	胎土: 9/0白/施釉: 透明	胎土: 9/1白,施釉: 透明, 呉須: 暗青	普	良好	(8/9/10 のセット)
9	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(8.7)	1.9	4.8	ナテ→施釉 圈線	ナテ,染付	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,文様: 5YR3/4暗赤 褐	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,呉須: 暗濃青~薄 青	密	良	(8/9/10 のセット)
10	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(8.4)	1.82	(4.6)	回転ナテ→施釉	回転ナテ→染付→ 施釉	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,口縁: 7.5YR3/4暗 褐	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,呉須: 薄青~暗濃 青	密	良	(8/9/10 のセット)
11	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(11.0)	2.3	(6.3)	回転ナテ→施釉	回転ナテ→染付→ 施釉	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,口縁: 7.5YR3/4暗 褐	胎土: 灰白N8/2,施釉: 透明,呉須: 濃青	密	良	(11/12/1 3セット)
12	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(10.9)	2.3	(6.2)	回転ナテ→施釉	ナテ→施釉	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,文様: 7.5YR3/4暗 褐	胎土: 灰白N8/1,施釉: 透明,文様: 7.5YR3/4暗 褐,呉須: 暗濃青~薄青	密	良	(11/12/1 3セット)
13	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(10.8)	(6.4)	2.2	回転ナテ,施釉	回転ナテ,染付,施釉	胎土: 灰白N8/0,施釉: 透明,口縁: 7.5YR3/4暗 褐	胎土: 灰白N8/1,施釉: 透明,呉須: 暗濃青	精良	良好	(11/12/1 3セット)
14	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	—	2.2~ 2.6cm	(7.8)	回転ナテ,施釉	回転ナテ,施釉,陽刻	胎土: 灰白N8/0,施釉: 青緑	胎土: 灰白N8/0,施釉: 青緑	精良 砂粒をほとんど含まない	良好	(14/15/1 6セット)
15	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	(15.5)	(7.7)	2.6	施釉	陽刻→施釉	胎土: 灰白N8/2,施釉: 青緑/高台: 透明	胎土: 灰白N8/3,施釉: 青緑	密	良	(14/15/1 6セット)
16	⑰	SX105 焼土中	磁器 小皿	—	—	[1.3]	(7.8)	施釉	陽刻→施釉	胎土: 灰白N8/1,施釉: 青緑/高台: 透明	胎土: 灰白N8/2,施釉: 青緑	密	良	(14/15/1 6セット)
17	⑰	SX105 焼土中	土型	—	【縦幅】 [16.7] 【横幅】 14.8	【厚】 1.2~ 1.5cm	7.7	ナテ,工具等ナテ,指オ サエ,布オサエ	ナテ/工具等のナテ	7.5YR7/6橙	2.5YR7/6~2.5YR6/6橙	普 1mm以内の石英・長石を含む	良	
29	⑰	SX105 裏込め	土師質土器	口縁部	(10.6)	—	[1.4]	回転ナテ	回転ナテ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	精良 砂粒をほとんど含まない	良	
30	⑰	SX105 裏込め	土師質土器	底部	—	(5.6)	(0.6)	回転ナテ 底部: 静止系切り	回転ナテ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/5にぶい橙	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
31	②	1面精査	磁器	口縁部	(10.2)	[4.6]	—	回転ナテ→施釉	回転ナテ→施釉	胎土: N8/0灰白,施釉: 透明,呉須: 薄青	胎土: N8/1灰白,施釉: 透明,呉須: 薄青	蜜	良	
32	⑭	礫層 層位番号1	陶器	底部	—	5.1	[1.35]	回転ナテ→施釉	ナテ	胎土: 2.5Y8/2灰白,施釉: 2.5Y7/3浅黄	2.5Y8/2灰白	普 1mm以内の長石を含む	良好	
33	⑭	礫層 層位番号1	陶器 備前焼摺鉢	底部	—	—	[5.7]	粗いナテ,粗いヘラクス リ	襷目	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR4/6赤褐	普 2mm以内の石英・長石を含む	良好	
34	⑪	1面目 黒色層	土師質土器	口縁部	(11.0)	(6.2)	[1.4]	回転ナテ	回転ナテ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	普 1~4mm程度の石英・長石等を含む	良	
35	⑯	SP108 基盤層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.85]	ナテ	ナテ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
36	⑭	礫層層位 番号1	須恵質土器	口縁部	—	—	[3.2]	ナテ,ケスリ	ナテ	N6/0灰	N6/0灰	普 1mm程度の石英・長石を含む	良	
37	⑯	SP108 基盤層	土師質土器 足釜	脚上部	—	—	[6.1]	指オサエ,板ナテ	ハケ・マツ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm程度の石英・長石 1~3mm程度の赤色粒を含む	良	
38	⑭	A層上層	弥生土器 壺	底部	—	(2.8)	[4.3]	ミガキ,ナテ	マツ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	普 3mm以内の石英・長石・黒雲母を含む	良	

□=残存 ○=推定

第5表 出土土器観察表2

番号	調査区名	出土層名 遺構	種類 器種	部位	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面			
39	⑭	A層上層	土師器	把手	【長さ】 8.5	【幅】 3.8	【厚】 2.1	ナテ、接合部：ナテ→ 刻み目	ナテ	5YR6/6橙	5YR6/7橙	普 4mm以下の石 英・長石・赤色粒を 含む	良	
40	⑯	A層	陶器 溝縁皿	口縁部	(11.9)	[2.15]	—	回転ナテ、施釉	回転ナテ、施釉	胎土：10YR6/2 灰黄褐、 施釉：灰	胎土：10YR6/3 灰黄褐、 施釉：灰	蜜 砂粒をほとんど 含まない	良	
41	⑮	A層東側 石積中	陶器	口縁部	—	—	[1.95]	ナテ→施釉	ナテ→施釉	胎土：5YR6/4 にぶい橙、 施釉：白	胎土：5YR6/4 にぶい橙、 施釉：白	普 0.5mm以下の石 英・長石を含む	良	
42	⑯	A層	土師質土器 皿	底部	(9.1)	(5.8)	1.7	回転ナテ、ナテ	回転ナテ、ナテ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普 1mm以下の石 英・長石・雲母・赤 色粒を含む	良好	
43	西	A層	須恵質土器 椀または杯	口縁部	(13.6)	—	[2.6]	回転ナテ	—	7.5Y6/1灰	5Y8/1灰白	普 1mm以下の石 英・長石を含む	良	
44	⑯	A層	土師質土器	口縁部	—	—	[2.1]	回転ナテ	マツ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	精良 1mm以下の 長石を含む	良	
45	⑯	A層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.8]	マツ	マツ	7.5YR7/6橙	2.5Y7/3浅黄	普 0.5mm程度の石 英・長石・赤色粒を 含む	良	
46	⑯	A層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.5]	ナテ	ナテ	2.5Y6/1黄灰 2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	普 石英・長石の粒 を含む	不良	
47	⑯	A層	土師質土器	口縁部	—	—	[2.8]	ナテ	ナテ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	普 0.5mm以下の雲 母を少量含む	良	
48	⑮	A層 東側 石積中	土師質土器 椀	高台	—	(5.7)	[1.4]	ナテ、回転ナテ、指オサ エ、 底部：回転ヘラ切り	マツ	2.5Y8/2灰白 10YR6/6明黄褐	2.5Y8/2灰白	普 1mm以下の石 英・長石を含む	不良	
49	西	A層	黒色土器	底部	—	(8.0)	[1.3]	ナテ	ヘラガキ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y2/1黒	普 1mm以下の石 英微量に含む	良	
50	西	A層	須恵質土器 鉢	底部	—	(11.6)	[2.8]	回転ヘラクスリ	回転ヘラガキ	N7/0灰白	N6/0灰	普 2mm以下の石 英・長石等を含む	良	
51	⑮	A層	土師質土器 足釜	口縁部	—	—	[6.1]	指オサエ、板ナテ、ナテ	ナテ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/13にぶい黄褐	普 0.5～2.5mm程 度の石英・長石等、 1mm程度の赤色 粒・金雲母を含む	良	
52	西	A層	有孔土錘	—	【長さ】 4.3	【幅】 0.95	【孔径】 0.3	ナテ、指オサエ	—	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	普	良	
53	西	B層	須恵質土器 椀または杯	口縁部	(14.2)	—	[2.9]	回転ナテ	ナテ、マツ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	普 2mm以下の石 英・長石を含む	良	
54	西	B層上面	土師質土器 椀	口縁部	(15.2)	—	[4.7]	ナテ	ヘラガキ、一部マツ、ナ テ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	粗 0.5～2mm程 度の石英・長石・赤 色粒・雲母を含む	不良	
55	西	B層	土師質土器	底部	—	(6.0)	[1.1]	ナテ	ナテ	10YR8/3浅黄橙	2.5Y8/1灰白	精良 1mm以内の 長石を含む・砂粒を ほとんど含まない。	良	
56	⑮	B層	瓦器	口縁部	(10.0)	—	[1.7]	ナテ、マツ	ヘラガキ	2.5Y4/1黄灰	5Y4/1灰	普 0.5～2mm程 度の石英・長石等を含 む	良	
57	⑯	B層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.08]	ナテ	ナテ	2.5Y6/2灰黄	5Y5/1灰	普 1mm以下の石 英・長石・黒色粒を 含む	良	
58	⑮	B層	須恵質土器	口縁部	—	—	[2.9]	ナテ	マツ	N5/0灰	N5/0灰	普 1mm程度の石 英・長石を含む	良	
59	⑯	B層	土師質土器	底部	—	—	[0.7]	ナテ、マツ	回転ナテ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	普 1mm以下の石 英・長石を含む	良	
60	⑯	B層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.7]	ナテ	ナテ	2.5Y4/2暗灰黄	2.5Y4/2暗灰黄	普 0.5mm以下の黒 雲母～金雲母を少 量含む	良	
61	⑭	B層	土師質土器	口縁部	—	—	[3.9]	ナテ	ナテ	5YR6/3にぶい橙 5YR4/1褐灰	7/5YR6/3にぶい橙	普 1mm以下の石 英・長石・赤色粒・ 黒色粒を含む	良	

□=残存 ○=推定

第6表 出土土器観察表3

番号	調査区名	出土層名遺構	種類器種	部位	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面			
62	⑬	B層	土師質土器鍋	口縁部	—	—	[3.75]	ナテ	ナテ	10YR5/6黄褐	2.5Y5/3黄褐	普 2mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良	
63	⑬	B層	土師質土器	口縁部	—	—	[2.8]	ナテ	ハケメナテ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/2灰黄, 5YR6/3にぶい橙～5YR5/6明赤褐	普 1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む	良	
64	西	B層	須恵質土器鉢	口縁部	(29.6)	—	[8.6]	回転ナテ, タキ→ナテ	回転ナテ	N6/0灰～N4/0灰	N6/0灰～N4/1灰	普	良	
65	⑬	B層	土師質土器土錘	—	【長さ】 [2.65]	【幅】 1.1	【厚】 1.2	マツ	—	5YR7/4にぶい橙	5YR7/5にぶい橙	普 1mm程度の赤色粒を含む	良	
66	西	B層	土師質土器	—	—	—	3.7	ナテ	ナテ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐, 5YR6/5にぶい橙	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	
67	⑫	B層	弥生土器甕	口縁部	(16.8)	—	[4.15]	ヨコナテ, マツ	ヨコナテ, クスリ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/3にぶい黄褐	普 1.5mm以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良好	
68	⑫	B層	弥生土器高杯	口縁部	—	—	[4.9]	ヨコナテ	ヨコナテ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普 2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	
69	⑫	B層	弥生土器	脚部	—	—	[1.85]	ナテ	マツ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良	
70	⑮	B層	弥生土器	高坏底部	—	—	[1.6]	ナテ	ナテ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 1mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	
71	⑬	B層	弥生土器壺	口縁部	—	—	[1.9]	ナテ	ナテ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5～2mm程度の石英・長石・赤色粒を含む	良	
72	⑫	B層	製塩土器	底部	—	4.8	[2.0]	ナテ	マツ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	普 1mm以下の石英・長石を含む	良	
73	⑭	C層	土師質土器	口縁部	—	—	[1.5]	ナテ	ナテ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	普 0.5mm程度の雲母・赤色粒を含む	良	
74	⑱	C層	須恵質土器	口縁部	—	—	[2.3]	回転ナテ	回転ナテ	N6/0灰	N7/0灰白	普 0.5～1mm程度の石英・長石・黒色粒を含む	良	
75	⑮	C層上面	須恵質土器	高坏底部	—	8.6	[3.7]	回転ナテ	回転ヘラクスリ, 指オサエ	N7/0灰白～N6/0灰	N7/0灰白～6/0灰	普 1mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良	
76	⑮	C層上面	弥生土器	口縁部	—	—	[8.1]	ナテ, 凹線文	ナテ	10YR6/2灰黄褐～7.5YR6/3にぶい褐	10YR6/2灰黄褐～10YR5/1褐灰	普 3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む	良	
77	⑮	C層上面	弥生土器甕	口縁部	—	—	[5.3]	マツ, ナテ	指オサエ, マツ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	普 0.5～2.5mm程度の石英・長石・角閃石を含む	良	
78	⑪	C層	弥生土器	口縁部	—	—	[1.15]	マツ	マツ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/4にぶい褐	粗 2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
79	⑱	C層	弥生土器	口縁部	—	—	[0.8]	ナテ	ナテ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	良	
80	⑫	B・C層の境	弥生土器	体部	—	—	[4.4]	鋸歯文	マツ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 2mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む	良	
81	⑫	B・C層の境	弥生土器	口縁部	7.4	—	[1.5]	ナテ, マツ	マツ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	普 0.5～2mm程度の黒雲母・角閃石・石英・長石等を含む	良	
82	⑧	C層	弥生土器壺	底部	—	(9.6)	[4.6]	ナテ, マツ	マツ	5YR5/2灰褐～5YR5/3にぶい赤褐	10YR5/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒・金雲母を含む	良	
83	⑧	C層	弥生土器甕	底部	—	(8.0)	[2.95]	ナテ, 底部マツ	マツ	2.5Y6/1黄灰～2.5Y5/1黄灰	2.5Y6/3にぶい黄	普 3mm以下の石英・長石を多量に含む	不良	
84	⑬	C層	弥生土器高杯	脚部	—	—	[3.9]	ナテ, マツ	ナテ, マツ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR4/4褐	普 0.5mm程度の角閃石・石英・長石・黒雲母を含む	良好	
85	⑩	C層	弥生土器高坏	底部	—	—	[1.6]	マツ, 板ナテ	マツ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒を含む	良	

□=残存 ○=推定

第7表 出土土器観察表4

番号	調査区名	出土層名遺構	種類器種	部位	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面			
86	⑩	不明	陶器皿	口縁部	—	—	[2.6]	ナテ,施釉	ナテ,施釉	胎土:7.5Y7/1灰白,施釉:7.5Y8/1灰白	胎土:7.5Y7/1灰白,施釉:7.5Y7/1灰白	普 0.5mm以下の石英・長石・黒色粒・金雲母を含む	良	
87	西	北端清掃中	陶器蓋(香炉)	口縁部	(9.6)	—	[3.8]	施釉,ナテ	施釉,ナテ	胎土:2.5Y7/2灰黄,施釉:7.5Y6/2灰オリーブ	胎土:2.5Y7/2灰黄,施釉:5Y6/2灰オリーブ	普	良	
88	③	柵外側	須恵質土器	口縁部	(11.2)	—	[2.4]	ナテ	ナテ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	精良 砂粒をほとんど含まない	良	
89	⑭	不明	土師質土器	口縁部	—	—	[1.6]	回転ナテ	回転ナテ	2.5Y8/1灰白~10YR8/2灰白	2.5Y8/1灰白~10YR8/2灰白	精良 1mm以下の長石・赤色粒を含む	良	
90	③	柵外側	土師質土器杯または皿	底部	—	—	[0.6]	ナテ	回転ナテ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/3淡黄	精良 砂粒をほとんど含まない	良	
91	西	表採	須恵質土器	体部	—	—	[4.6]	平行タタキ	青海波文	N7/0灰白	N6/0灰	普 4mm以下の石英・長石を含む	良	

第8表 出土瓦観察表

番号	調査区名	出土層名遺構	種類器種	法量			調整		色調	胎土	焼成
				全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	凸面	凹面			
18	105	焼土中	軒棧瓦	[15.5] 【軒丸部】 8.5	[12.6] 【軒丸部】 [8.5]	1.6 【軒丸部】 2.65	格子文タタキ,コビキB,面取り 軒丸部:ナテ	ナテ,面取り 軒丸部:ナテ	7.5Y8/1灰白	普	良
19	105	焼土中	軒平瓦	[22.2]	[10.5]	[3.85]	格子文タタキ	ナテ,面取り	凸面:10YR6/6明黄褐 凹面:N3/0暗灰 断面:10YR6/6明黄褐	密	良
20	105	焼土中	軒平瓦	[5.2]	[13.1]	[3.5]	ナテ コビキB	ナテ	凸面:N5/0灰 凹面:N5/0灰,N7/0灰 断面:N7/0灰	密	良
21	105	焼土中	軒平瓦	[2.5]	[7.1]	[4.75]	ナテ	板ナテ	凸面:N5/0灰 凹面:7.5Y8/1灰白 断面:7.5Y8/1灰白	密 3mm以下の石英・長石を含む	良
22	105	焼土中	軒平瓦	[10.4]	[9.3]	[1.7] 【瓦当部分】 2.2	ナテ,面取り	ナテ,コビキB,面取り	凸面:2.5Y7/2灰黄 凹面:2.5Y7/2灰黄 断面:2.5Y7/1灰白	密	良
23	105	焼土中	軒平瓦	[6.0] 【軒部】 4.5	[9.0] 【軒部】 [9.0]	1.7 【軒部】 2.4	ナテ,キラ粉,面取り	ナテ,コビキB	N7/0灰白	普 1mm大の砂粒含む	良
24	105	焼土中	軒平瓦	[1.4]	[8.3]	—	—	—	7.5YR7/4にぶい橙	密	良
25	105	焼土中	軒平瓦	【軒部】 3.9	—	1.5 【軒部】 1.8	ナテ	ナテ,ヨコナテ	凸面:5Y6/1灰 凹面:10YR7/2にぶい黄橙	普	良
26	105	焼土中	棧瓦	[12.85]	[16.3]	[1.65]	ナテ,コビキB,面取り	ナテ,面取り	凸面:N5/0灰 凹面:7.5Y8/1灰白 断面:7.5Y8/2灰白	密 2mm以下の石英・長石を含む	良
27	105	焼土中	平瓦	[16.9]	[14.7]	[1.85]	ナテ	ナテ	凸面:7.5Y6/6橙 凹面:7.5Y6/6橙 断面:10YR6/3にぶい黄橙	密	良
28	105	焼土中	平瓦	[10.9]	[8.8]	1.9	マツ	ナテ,コビキB,キラ粉	凸面:7.5YR5/4にぶい褐 凹面:10YR7/2にぶい黄褐 断面:7.5YR7/6橙	普 1mm程度の石英・長石・赤色粒を含む	良

□=残存 ○=推定



東調査区精査状況(西から)



中央調査区掘削風景(北から)

図 版 2



西調査区第6～10地点掘削状況(北から)



西調査区第16～18地点検出状況(東から)



西調査区第 16 ～ 18 地点掘削状況 (東から)



西調査区第 16 地点北壁土層 (南から)

図版 4



東調査区①検出状況（東から）



東調査区②検出状況（東から）



東調査区③検出状況（東から）



東調査区④検出状況（東から）



東調査区⑤検出状況（東から）



西調査区⑥検出状況（西から）



西調査区⑦検出状況（西から）



西調査区⑧東壁土層（西から）



西調査区⑨検出状況（西から）



西調査区⑩検出状況（西から）



中央調査区⑪検出状況（東から）



中央調査区⑫検出状況（東から）



中央調査区⑬検出状況（東から）



中央調査区⑭検出状況（東から）



中央調査区⑮検出状況（東から）



西調査区⑯ C層上面出土須恵器杯（東から）



SX110 東西畦土層（南から）



SP102 半掘状況（東から）



SP102 完掘状況（東から）

SP103 半掘状況（東から）

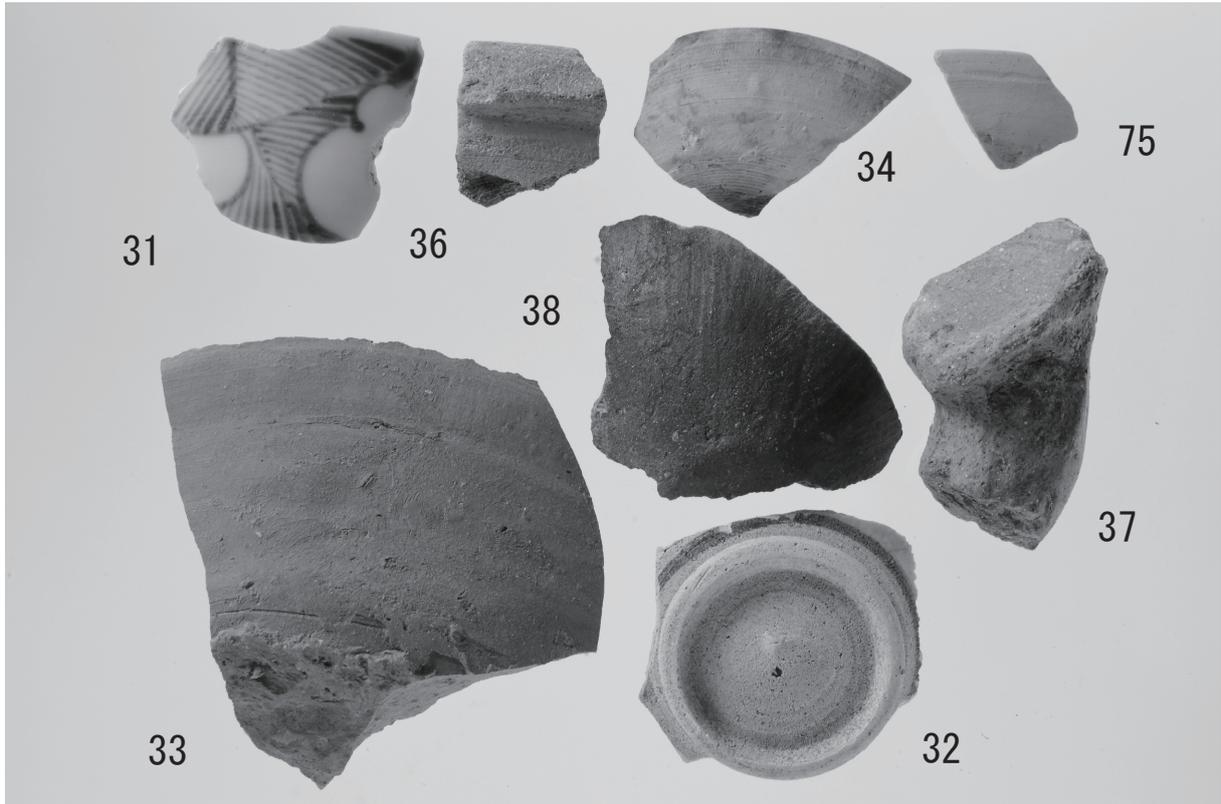


SP103 完掘状況（東から）

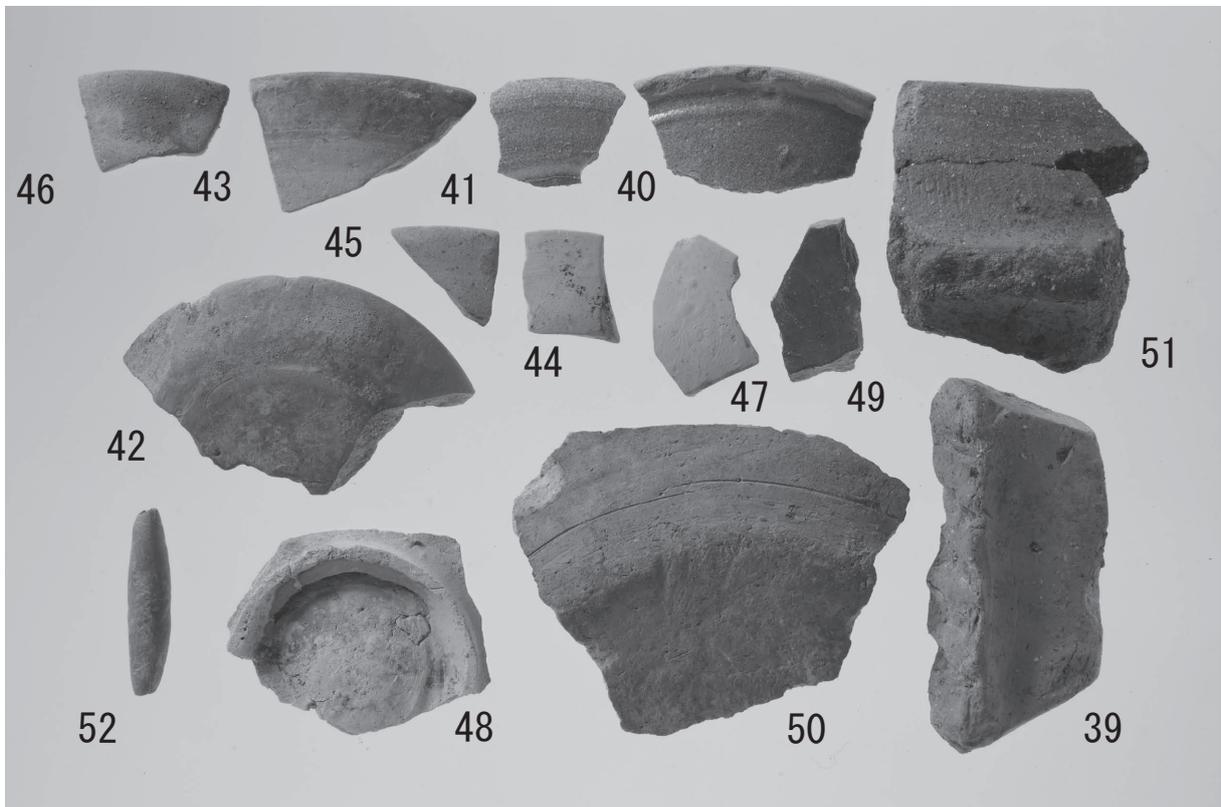


SP108・SP109 完掘状況（西から）



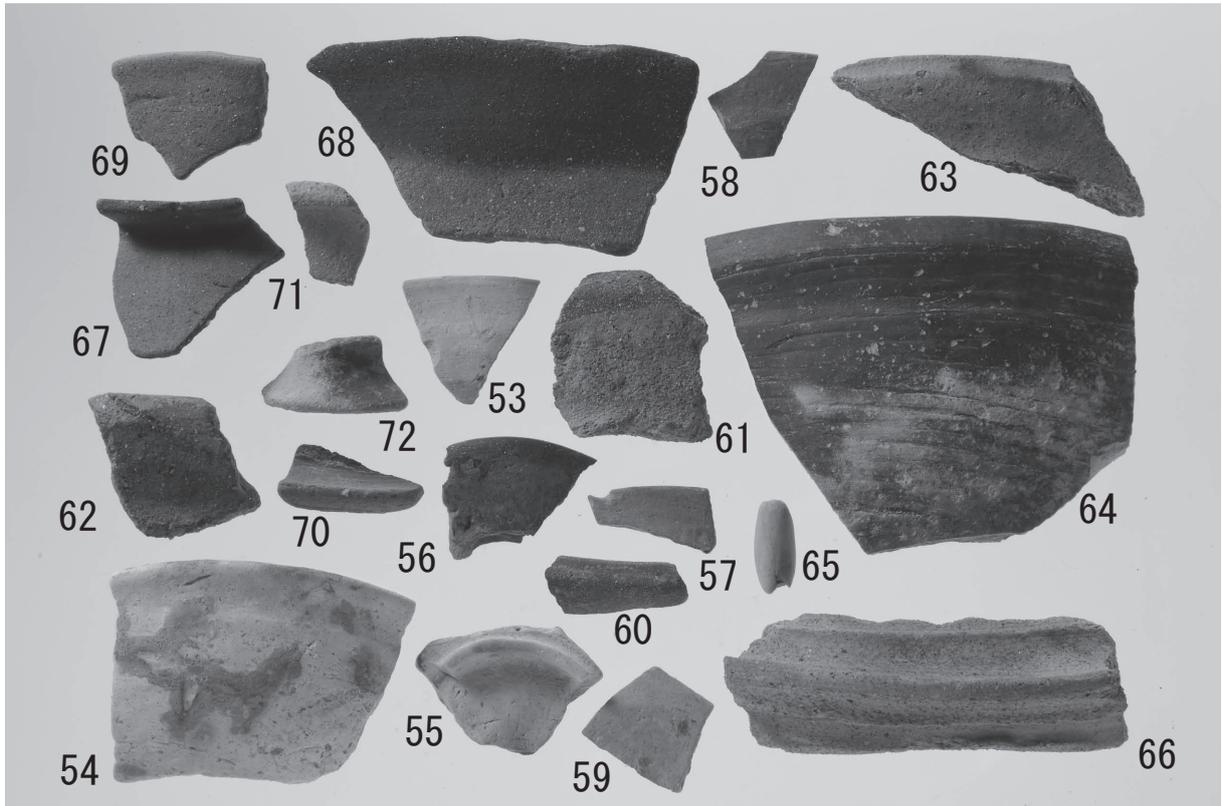


造成土より下位で A 層より上位の整地出土遺物

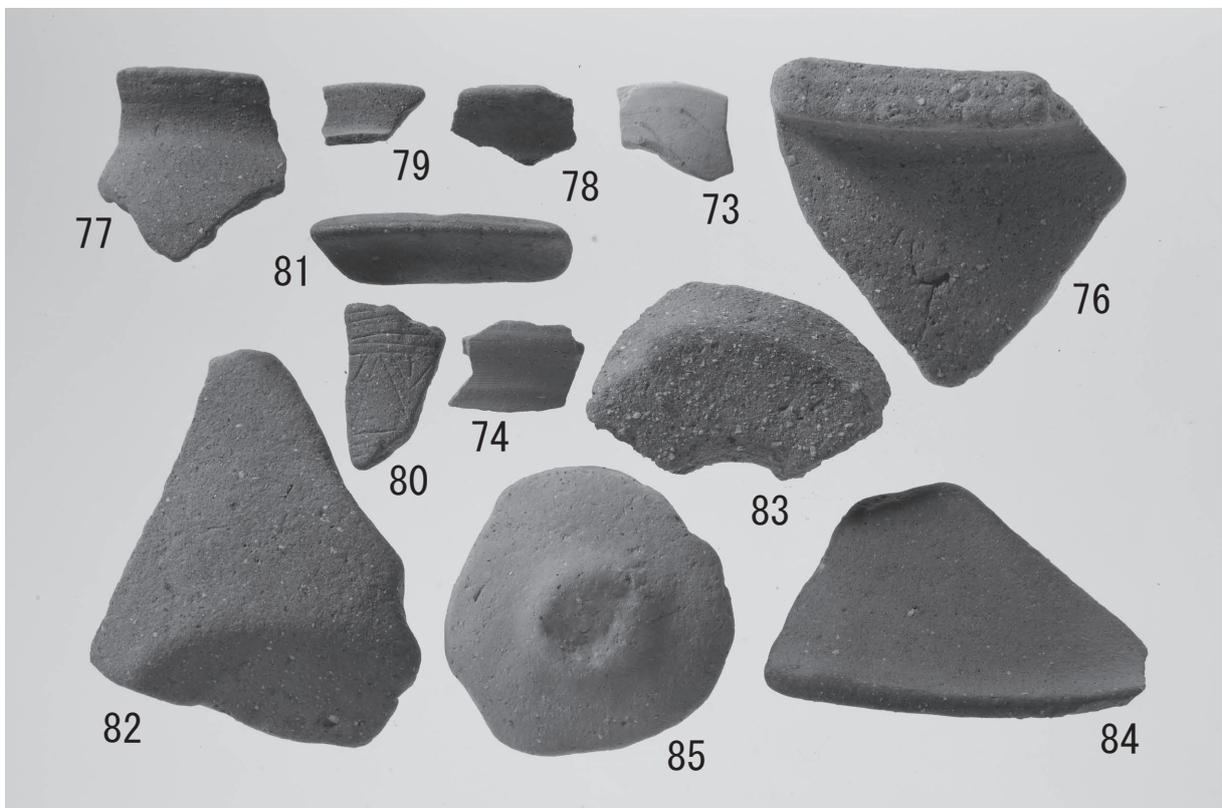


A 層出土遺物

(※ 39は造成土より下位で A 層より上位の整地出土遺物)

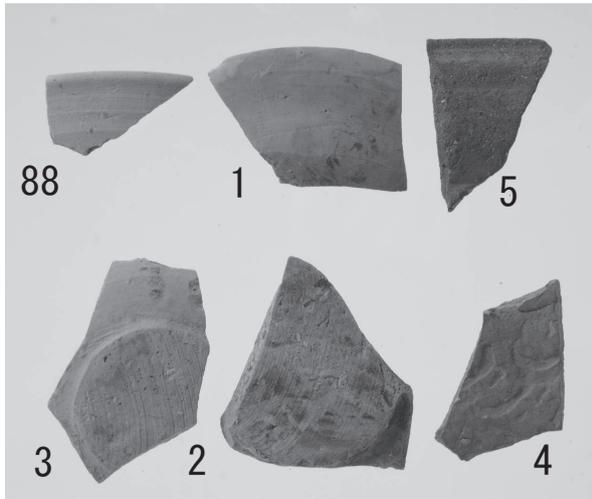


B 層出土遺物

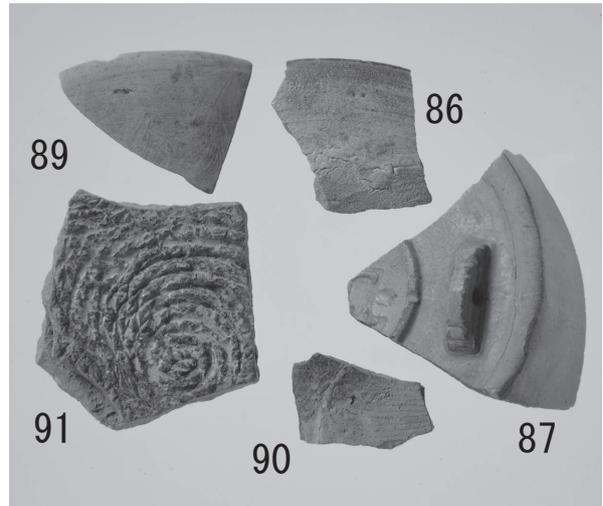


C 層出土遺物

图版 10



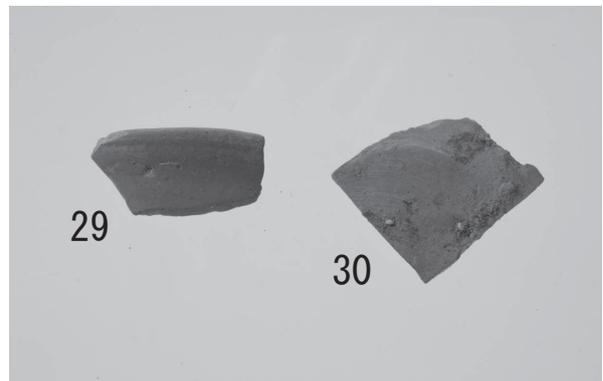
SX110 及び第 14 地点出土遺物



攪乱出土遺物



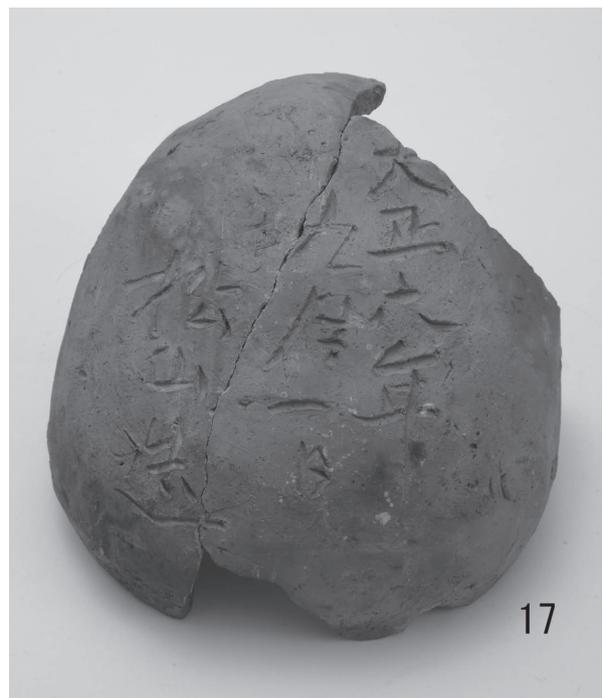
第 16 地点出土須恵器



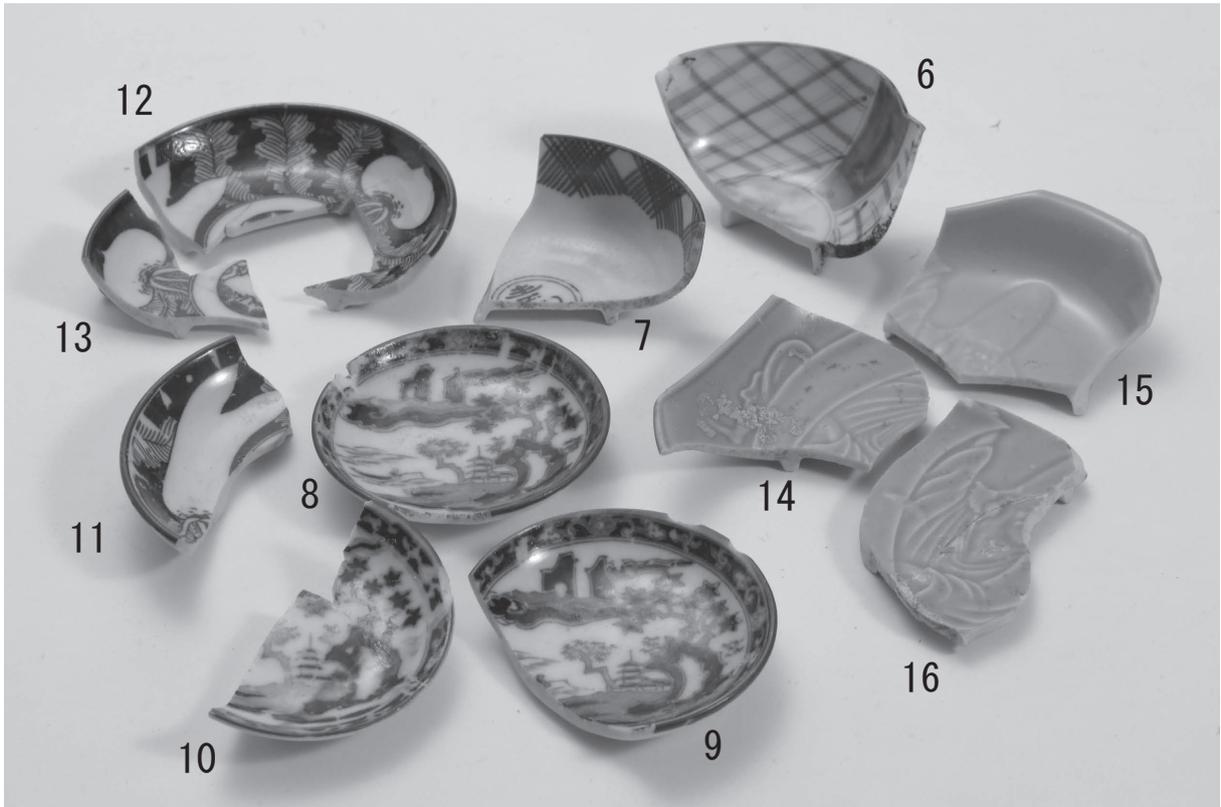
SX105 出土遺物



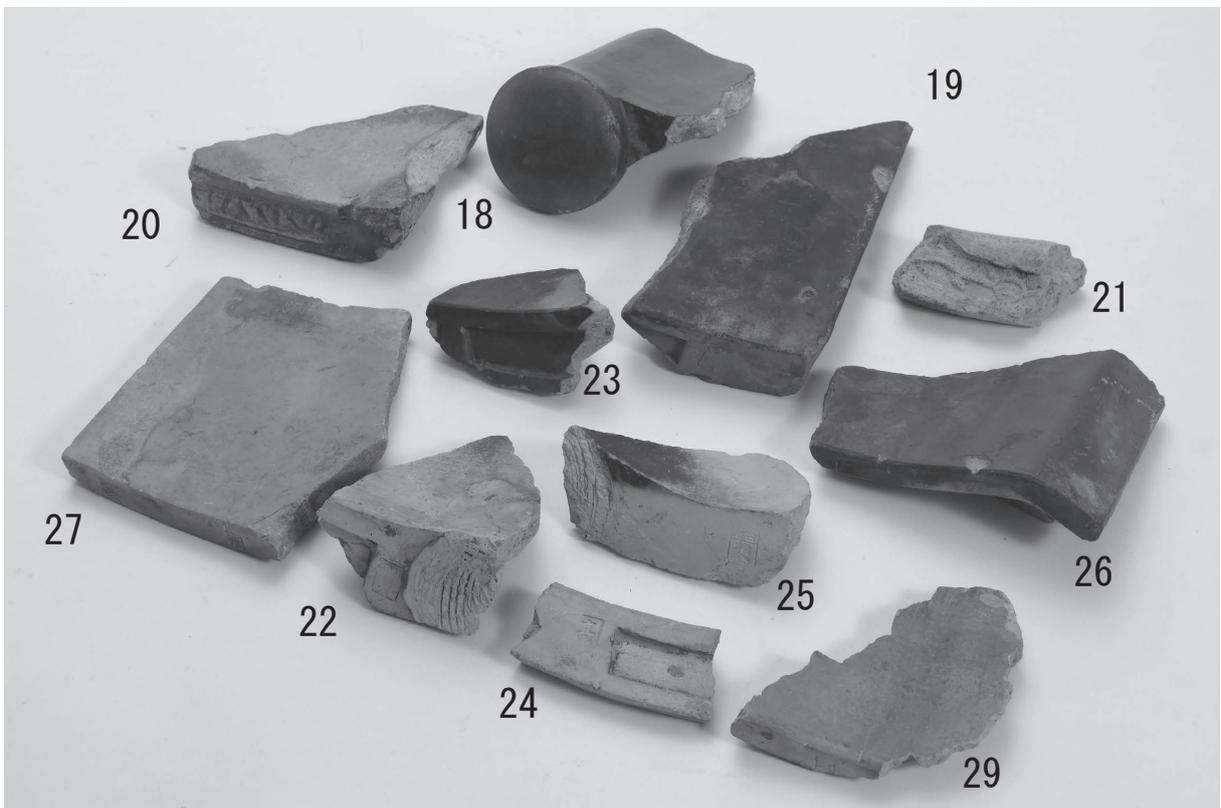
SX105 出土土型 (内面)



SX105 出土土型 (外面)



SX105 出土磁器



SX105 出土瓦

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと（ことぶさちょういっちようめちく）					
書名	高松城跡（寿町一丁目地区）					
副書名	寿町一丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第176集					
編著者名	新井場 萌、高上 拓					
編集機関	高松市教育委員会					
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660					
発行年月日	西暦2017年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	37201			
たかまつじょうあと 高松城跡 ことぶさちょういっちようめちく （寿町一丁目地区）	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 ことぶさちょう 寿町 いっちようめ 一丁目	北緯 34° 20′ 57″	東経 134° 13′ 02″ 57″	2016年2月2日～ 3月10日	549 m ²	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
高松城跡 （寿町一丁目地区）	城館	江戸時代	柱穴跡、性格不明遺構	土師質土器、陶磁器、瓦		
要約	<p>高松城のかつての内曲輪、桜の馬場にあたる地点での開発事業に伴い、事前の記録保存による保護措置を実施したものである。</p> <p>既存建物により遺構面の大半が削平されていたが、弥生時代以降、城郭整備直前までの地形形成過程及び近世の地盤造成、近代の土地利用を明らかにした。</p>					

高松市埋蔵文化財調査報告第176集
寿町一丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
高松城跡（寿町一丁目地区）
平成29年3月31日
編集 高松市教育委員会 高松市番町一丁目8番15号
発行 株式会社 和田コーポレーション 高松市教育委員会
印刷 有限会社 河端商会